原町市埋蔵文化財調査報告書　第11集

県道相馬浪江線付替え工事
関連遺跡発掘調査報告書

原（はら）　遺　跡

遺　構　編

1995年3月

福島県相双建設事務所
福島県原町市教育委員会

原町市埋蔵文化財調査報告書　第11集

県道相馬浪江線付替え工事
関連遺跡発掘調査報告書

原（はら）　遺　跡

遺　構　編

1995年3月

福島県相双建設事務所
福島県原町市教育委員会

序

文化財は、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった生活の様子や文字がまだ無かった時代の人々の暮らしについて多くの情報を私たちに与えてくれます。

近年、相双地方では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史のなか引き継がれてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では埋蔵文化財の保護、保存に努めているわけですが、平成４年度と５年度の２ヵ年度にわたり県道相馬・浪江線の付替え工事に伴い、原遺跡の発掘調査を実施し、その内容を記録として残すことといたしました。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡や調理施設と推定される集石遺構が多数発見されたほか、縄文時代の人々が使用した土器、石器などもたくさん出土いたしました。

今後、これを契機として地域の文化財保護のためにお役立ていただければ幸いに存じます。

おわりに、調査および本報告書の刊行にあたってご指導いただきました福島県教育庁文化課および、県立原町高等学校の玉川一郎教諭、また、調査にご協力いただきました相双建設事務所の皆様に深く感謝いたすとともに、調査に関係された各位に衷心より謝意を表します。

平成７年３月

原町市教育委員会
教育長　渡部　秀夫

目　　次

序
目　次
例　言

第１章　原町市をとりまく環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 3

第２章　原遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 6
　第１節　遺跡の位置 …… 6
　第２節　周辺の遺跡 …… 6

第３章　試掘調査 …… 10
　第１節　調査に至る経過 …… 10
　第２節　調査経過及び成果 …… 10

第４章　本調査に至る経過と調査方法 …… 13
　第１節　調査に至る経過 …… 13
　第２節　調査方法 …… 15

第５章　発見された遺構 …… 16
　第１節　基本層序 …… 16
　第２節　竪穴住居跡 …… 16
　第３節　土坑 …… 37
　第４節　溝跡 …… 49
　第５節　集石遺構 …… 49
　第６節　焼土跡 …… 49
　第７節　木炭窯跡 …… 58

第６章　まとめ …… 59

写真図版
報告書抄録

例　　言

1　本報告書は平成４～５年度に原町市教育委員会が実施した県道相馬・浪江線付替え工事にかかる原町市馬場所在の原遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、福島県相双建設事務所より委託を受け、原町市教育委員会が主体となり発掘調査を担当した。

3　発掘調査は平成５年２月12日から３月25日（第１次調査）及び平成５年10月19日から11月24日（第２次調査）にかけて実施し、資料整理及び報告書作成は平成６年７月13日から平成７年３月20日にかけて実施した。

4　発掘調査、報告書作成にあたり、次の機関および個人から指導助言を得ている。

福島県教育委員会文化課、玉川一郎（原町高等学校教諭）、鈴鹿良一・本間　宏（財団法人福島県文化センター）、高荒　淳・原　充広・丸山泰徳（財団法人福島市振興公社）、森　幸彦（福島県立博物館）

5　本報告書の執筆および編集は原町市教育委員会　堀　耕平、齋藤直之が行なった。

6　調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。

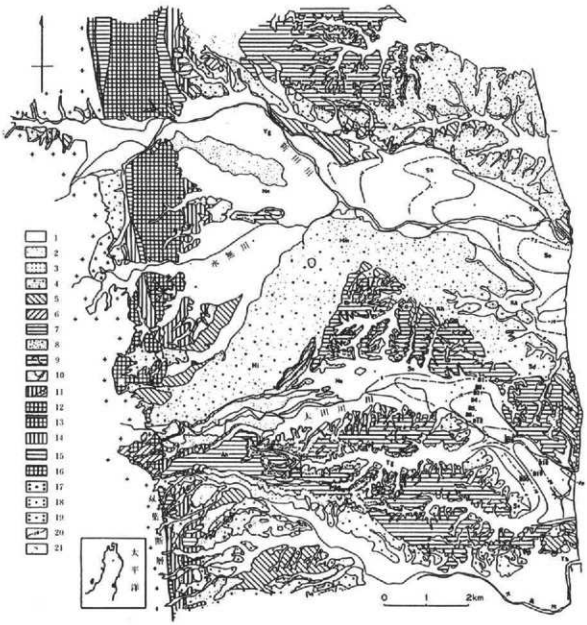
第１章　原町市をとりまく環境

第１節　地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し、行政境としては北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯舘村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,600人、面積は約199,66ｋ㎡で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するＪＲ常磐線と国道６号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100ｍ以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯とは相双断層（岩沼－久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃の新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアパラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～650ｍ前後になっている。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。高地周辺では標高100～150ｍ前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30ｍを測る。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第１段丘、第２段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む７段丘の存在が知られており、特に第１段丘である畦原段丘と第４段丘である雲雀ケ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20ｍ以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木２ａ式期の遺跡である置浜の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高６ｍ前後に求めている。現在では圃場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。



1："沖積層"，2：第６段丘構成層，3：第５段丘構成層，4：第４段丘構成層，5：第３段丘構成層，6：第２段丘構成層，7：第１段丘構成層，8～11：竜の口層，8：同ｃ層（砂岩），9：同ｃ層（シルト岩・京塚沢凝灰岩），10：同ｂ層，11：同ａ層，12～19：基盤岩類，12：塩手層，13：小山田層，14：宮沢層，15：中の沢層，16：柄淫層，17：古生層，18：花崗岩類，19：脈岩，20：竜の口層上面標高(m)，21：ボーリング地点と孔番，Ah：畦原，Bb：馬場，Hi：雲雀ケ原，Hm：原町市街，Ht：東高松，Ka：菅浜，Kh：北原，Kk：片倉，Mg：間形沢，Mm：米々沢，Nn：長野，No：中太田，Om：大徳，Sd：宇，Se：下江井，Sk：下北高平，So：下太田，Ss：下渋佐，Tb：塚原，Tg：鶴谷，Tm：館前，Yg：横上

第１図　原町地域の地質図（原図中川他1979）

第２節　歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や県営ほ場整備事業及び海浜リゾート計画であるＣＣＺ建設などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代の遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでにも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、尚一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、平成７年には国指定無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り広げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」建設が予定され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として、その活動が期待されている。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺物の出土する散布地が９ヶ所知られている。立地条件を概観すると、畦原Ａ遺跡、熊下遺跡、袖原Ａ遺跡などは太田川流域の第１段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ケ崎Ａ遺跡、西町遺跡、橋本町Ａ遺跡などは第４段丘面の雲雀ケ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は早期末から前期初頭の住居跡の調査が行なわれた片倉の八重米坂Ａ遺跡、隣接する羽山Ｂ遺跡などが阿武隈高地裾部に所在している。太田川を北に臨む第１段丘面に所在する片倉の畦原Ｆ遺跡の調査では早期末から前期前葉の土坑３基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地に所在する遺跡も知られている。前期初頭の大木２ａ式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬這遺跡は雲雀ケ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木９～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第３段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木８ａ～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約１km、同段丘面上に立地する植松遺跡では、昭和52（1977）年の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡１軒が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞Ｃ１～Ａ式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡など多くの遺跡が市内各地に所在している。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を出土する桜井遺跡が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石包丁が出土する例が報告されている。また、平成５年に調査された高見町Ａ遺跡からは弥生時代の中期末に位置付けられる十王台式

土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が２軒発見されている。

古墳は、前方後方墳として東北第２位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺の古墳と共に桜井古墳群を構成している。桜井古墳は昭和58（1983）年に範囲確認調査が行なわれており、軸長約72ｍの墳丘部に、幅約11.20ｍの周溝が巡っていたことが確認されている。

他に昭和42（1967）年に、中太田所在の墳丘部軸長約40ｍの前方後円墳と推定される与太郎内１号墳、桜井所在の墳丘部直径約12ｍの円墳である高見町１号墳の発掘調査が行なわれ、高見町１号墳からは粘土廓設を伴う割竹形木棺の痕跡が確認されている。平成５年の高見町Ａ遺跡の調査では、既に削平されてマウンドや埋葬施設は未発見であったが、外郭直径約15ｍ，幅約２ｍの円形の周溝１基が発見され、高見町２号墳と命名されている。この調査では塩釜式期の竪穴住居跡２軒が市内では初めて発見されており、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳の出現過程について極めて重要であることを示している。この他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地蔵堂古墳群、江井の西谷地古墳群、小木迫の五治郎内古墳群などが所在している。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況をみると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平に北沢横穴群、京塚沢横穴群、新山前横穴群、北泉に大磯横穴群、地蔵堂横穴群、太田川北部の上太田に道内迫横穴群、大甕に西迫東迫横穴群、雫に坂下横穴群、太田川南部の高には、昭和40（1965）年に調査された高林古墳群などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とほぼ合致している。また、中太田の中畑横穴群、羽山横穴群、上太田の新橋横穴群は、雲雀ケ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、昭和48（1973）年に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴は、玄室奥壁に壁画が描かれており、調査後に保存処理を施して年間８回の一般公開を通して社会教育に役立てている。

奈良・平安時代の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に擬定される泉廃寺跡や軍団跡に擬定される植松廃寺跡が新田川北川の丘陵裾部に所在しているが、発掘調査がほとんどなされておらず、その規模や内容については明確にし得ない。この遺跡からは布目瓦が出土しており、供給源として泉廃寺は大甕の京塚沢瓦窯跡が、植松廃寺は昭和59（1984）年に発掘調査が行なわれた入道迫瓦窯跡が考えられている。この他、馬場の滝ノ原遺跡では平安時代の須恵器窯跡３基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。

また、海岸部の金沢の丘陵の一帯には大規模な製鉄遺跡が所在している。平成元年度から５年度までに、財団法人福島県文化センター－遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、７世紀後半から９世紀の製鉄炉123基・木炭窯140基・竪穴住居跡121基・鍛冶炉16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化としては新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なか

った平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多珂神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、全体として、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大甕地区圃場整備事業に関連して平成２年に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花Ａ遺跡では、奈良～平安時代の竪穴住居跡３軒が確認されており、平成４年には上北高平の高松Ｂ遺跡でも奈良～平安時代と推定される竪穴住居跡２軒が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族の泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡・大甕七館の一つである明神館跡・奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡はその可能性が高い。平成２年に範囲確認調査が実施され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花Ａ遺跡に隣接し、太田川北岸の自然堤防上に立地している。

近世の遺構として、初頭期の慶長２（1597）年から同８（1603）年に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の寛文６（1666）年以降に築かれた野馬土手及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散しないように雲雀ケ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成５年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在ではほとんどが消滅してしまっており、その保護が急がれるが、昭和62年（1987）の桜井野馬土手の範囲確認調査及び、平成５年の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課により調査された馬場の五台山Ｂ遺跡、片倉の羽山Ｂ遺跡が阿武隈高地の山間部に遺されている。

第２章　原遺跡の位置と周辺の遺跡

第１節　遺跡の位置

原遺跡は、福島県原町市大字馬場字原に所在する縄文時代早期末から前期前葉を中心とする周知の遺跡である。ＪＲ常磐線原ノ町駅の南西、直線距離で約６kmの地点にある。遺跡は阿武隈高地から東に派生する相双丘陵を、太平洋に注ぐ太田川が開析した第２段丘上に立地し、標高は約81～82mを測る。東経約140°55′30″、北緯約37°36′に位置している。遺跡の西方約1.5kmには阿武隈高地東縁部と浜通り低地地帯を地質的に画する相双断層（岩沼－久ノ浜構造線）が南北方向に走っている。

第２節　周辺の遺跡

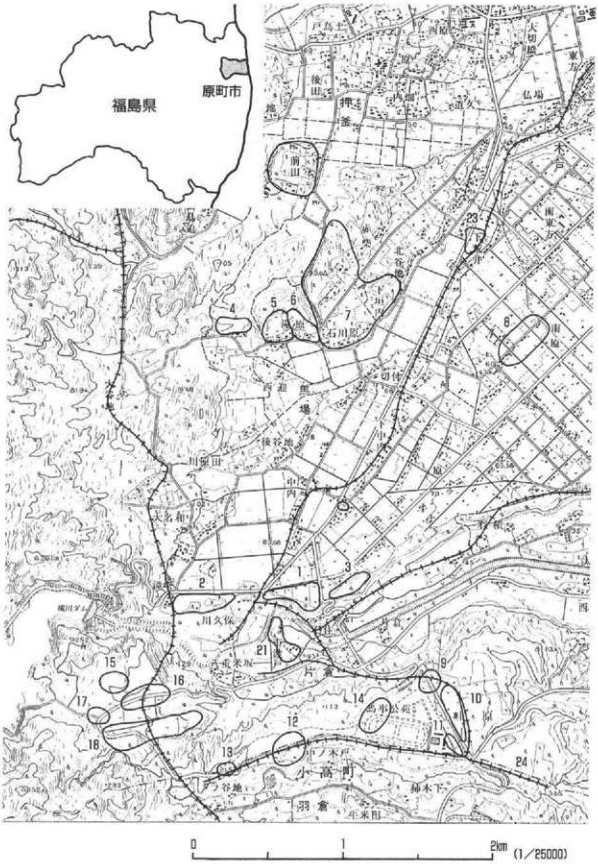
原遺跡（１）の立地する第２段丘面は、現在は水田及び大根などの畑地として利用されており、段丘の南端は雑木林になっている。原遺跡のすぐ西側の石倉遺跡（２）からは、臼玉等の装飾品等が採集されている。東側には石住遺跡（３）が所在しており、繊維土器が少数採集されている。

原遺跡から北に約1.5kmの低位丘陵南斜面には、川原田遺跡（４）、地切遺跡（５）、滝ノ原遺跡（６）、赤柴遺跡（７）が広く分布しており、いずれも縄文時代の遺跡である。

このうち、滝ノ原遺跡は、市道改良に伴い、平成４年に面積約1,200㎡が発掘調査され、縄文時代前期の竪穴住居跡１棟、中期の石囲い炉１基などが検出された。また同時に平安時代の須恵器窯跡３基が発見され、うち２基が発掘調査された。赤柴遺跡からは縄文時代早期の田ど上層式土器や黒曜石の剝片が採集されている。

原遺跡の北東約２kmには陣ケ崎Ａ遺跡（８）が所在し、旧石器時代の遺跡として登録されている。

太田川を挟んだ南側の第１段丘である畦原段丘には、平成７年開催予定の「ふくしま国体」の馬術競技場が建設されているが、これに先立ち、原町市教育委員会では昭和63（1988）年に馬術競技場建設予定地内の埋蔵文化財表面調査を実施した。この結果、県道沿いに畦原Ａ（９）・Ｂ（10）・Ｃ（11）遺跡、丘陵西端部に畦原Ｄ遺跡（12）の所在を確認した。その後、平成４年に表面調査により、隣の小高町にまたがって畦原Ｅ遺跡（13）を確認した。さらに、平成５年には、今回の同じ開発事業に伴い、新たに畦原Ｆ遺跡（14）が確認され、開発にかかる面積約400㎡を発掘調査した。



第２図　周辺の遺跡

畦原Ａ遺跡は、畦原段丘面の北側段丘崖から南側に広がる遺跡で、県道を挟んで縄文土器、石槍、寛永通寶が採集されている。昭和58（1983）年には県道の東側の切り通しのロ－ム最上層から、旧石器時代のものと思われる珪質頁岩の石核が１点採集されている。県道拡幅に伴い平成元年に行なわれた範囲確認の試掘調査では縄文時代早期末～前期初頭及び古代の土坑が見つかっている。

畦原Ｂ遺跡は、畦原Ａ遺跡の南、南側段丘崖に近い地域で、県道の西側で縄文土器、石匕、内面黒色処理の土師器が採集されている。平成元年の試掘調査では遺構・遺物は発見されなかった。

畦原Ｃ遺跡は、畦原Ａ・Ｂ遺跡に挟まれた、段丘の中心部、県道の東側にあり、石刃、縄文土器、羽口が採集されている。平成元年の試掘調査では遺構・遺物は皆無であった。

畦原Ｄ遺跡は、丘陵西端部の地域で、縄文時代前期の土器や小高町側で凹石が採集されている。平成３年に原町市国体事務局から、全長１㎞の野外走行路建設計画を知らされた原町市教育委員会は、走行路西端部及びその南を東西に走る市道改良部分が畦原Ｄ遺跡にかかることから遺跡保存の協議資料を得るため、同年に試掘調査を実施した。この結果、繊維土器や石器・竪穴住居跡などが検出され、縄文時代早期末～前期初頭の集落遺跡であることが判明した。その範囲は原町市側のみで約7,800㎡であった。当時の記録によれば、表土の30～40㎝までは土器を包含しないことから、工事は遺物包含層及び遺構検出面に影響の及ばない範囲で表土を除去し砂などによる盛土を施している。なお、市道改良部分の工法対応が困難な約900㎡について、同年発掘調査を実施した結果では、遺構は発見されず、若干の縄文土器が出土したにとどまっている。

畦原Ｅ遺跡は、畦原Ｄ遺跡の東、段丘面の南側に位置し、平成４年の市道改良工事の際に発見された。縄文時代の繊維土器の散布が東西約50ｍにわたり確認されたが、削平工事はほとんど終了していた。南北方向の広がりは、野外走行路の工事が既に終了しているため、表面調査による把握は困難な状況である。

畦原Ｆ遺跡は、発掘調査の結果、縄文時代早期末～前期前葉の土器が少数出土し、発見された土坑３基は同時期に比定されている。

以上、畦原段丘面上で確認される遺跡の多くは縄文時代に属しており、同段丘面上の広い範囲に未発見の遺跡があると推定される。畑地以外の山林の部分では、表面調査による遺跡の把握には限界があるため、試掘調査などによる確実かつ十分な確認作業が必要と考えられる。

この他、縄文時代の遺跡としては、畦原段丘北西の小丘陵に、羽山Ｂ遺跡（15）、八重米坂Ａ（16）・Ｂ（17）・Ｃ（18）遺跡、その西に五台山遺跡（19）、羽山遺跡（20）、畦原遺跡群の北側、太田川南岸の低位段丘面に市渡戸遺跡（21）が所在している。これらの多くは原遺跡と同様早期末～前期前葉を主な時期としている。このうち羽山Ｂ遺跡、八重米坂Ａ・Ｂ遺跡は、東北電力株式会社による原町火力発電所建設に関連して、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により平成２～４年にかけて発掘調査が実施されている。遺跡の内容は発掘調査報告書に詳しく、八重米坂Ａ遺跡では早期末～前期初頭の竪穴住居跡100軒以上などが報告されている。

羽山遺跡は現在では横川ダム湖底に沈んでいるが、故竹島國基氏により晩期末葉の大洞Ａ′式の縄文土器が収集されている。

畦原段丘の南、小高町側にも縄文時代の遺跡は広がっており、平成４年の県道拡幅工事に伴い約500㎡が発掘調査された荻原遺跡（22）からは、早期末の竪穴住居跡４軒などが発見されている。原遺跡とともに、重複関係の多い八重米坂Ａ遺跡の集落とは違ったあり方を示している。また、平成５年の発掘調査ではナイフ形石器が発見されている。

弥生時代の遺跡は少なく、原遺跡の北約0.5㎞の地点には、石庖丁が採集された中ノ内遺跡（23）が知られているにとどまっている。

その後、近世までの間には取り立てて説明できる遺跡は見当らない。相双地方では毎年藩政時代からの伝統行事である国指定無形民俗文化財相馬野馬追祭が繰り広げられるが、原町市内にはその証となる野馬土手（24）が築かれている。野馬土手は、寛文６（1666）年以降、馬の放散を防いだり、馬が畑を荒らさないようにするために築かれたもので、畦原段丘で見られるものはその西端部分にあたっている。同段丘及び太田川北岸の段丘上にも続いていたと考えられるが、土取りや道路拡幅などによりその多くは失われ、現在では丘陵の山林の中に一部分が残されているに過ぎなくなっている。相馬野馬追が当市のみにとどまらず、相双地方の共有財産であることから、野馬土手についても保護策を講ずる必要があろう。

なお、平成５年には小高町側で、石垣のある野馬土手の一部が発掘調査されている。

この他、近世の遺跡として、たたら操業による製鉄遺跡がある。畦原段丘の西、山間部には藩営の鉄山遺跡が残されている。平成２年には原町火力発電所建設に伴い五台山Ｂ（25）・Ｃ（26）遺跡が（財）福島県文化センターによって発掘調査され、近世から近代に属する製鉄炉２基などが発見されている。なお、平成５年に畦原Ｆ遺跡の北西の県道付替え工事中に近世の石塔婆１枚が発見されている。

第３章　試掘調査

第１節　調査に至る経過

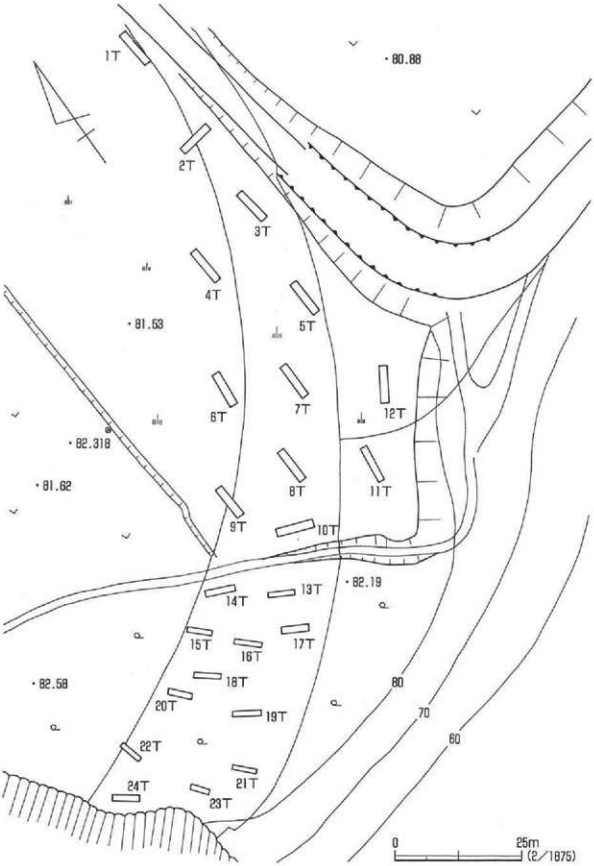
県道相馬・浪江線は阿武隈山地東縁を南北に走る主要幹線道路である。県道は、太田川右岸の第１段丘南北両側及び原遺跡の所在する左岸の第２段丘北側付近では、比高差がありカーブも多い状況であった。一方、畦原段丘上の県道の西側に平成７年に開催される福島国体の馬術競技場が建設されることになり、周辺の道路整備も大きな課題となった。原町市教育委員会では昭和63（1988）年に付近の分布調査を実施し、県道沿いに畦原Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、丘陵西端部に畦原Ｄ遺跡の所在を確認した。このうち畦原Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡については、福島県原町建設事務所による県道拡幅計画があり、平成元年に３遺跡についての部分的な試掘調査を実施した。その結果、畦原Ａ遺跡では縄文時代早期末葉～前期初頭と古代の遺構が発見された。

平成３年には原町建設事務所から、畦原段丘から太田川北岸の段丘に至る県道付替えの計画路線上の埋蔵文化財について照会があった。この段階では畦原Ａ遺跡、市渡戸遺跡、原遺跡の３遺跡が付替え道路にかかっていたが、平成４年に至り、市渡戸遺跡をはずした計画が示された。市教育委員会では計画路線について表面調査を実施したが新たな遺跡の発見はなかった。しかし、原遺跡の範囲や内容について、表面調査では明確に把握し得なかったため、保存協議の資料を得るための試掘調査を実施することになった。試掘調査は次の体制により実施した。

遺跡の名称　原（はら）遺跡
調査期間　平成４年11月17日～12月２日
対象面積　約４，２００㎡
調査面積　約３７０㎡
調査主体及び担当　原町市教育委員会（教育長　渡部　秀夫）
発掘作業員　紺野昭義　佐久間三雄　佐藤敏雄　松本武雄　渡辺辰男
事務局　原町市教育委員会文化課　課長　佐藤一男　係長　青田富雄　係員　武田耕平

第２節　調査経過及び成果

調査対象地の北半は牧草地のため、トレンチの設定も発掘もしやすい状況であったが、南半については、雑木林であったため、樹木の間に適当な大きさのトレンチを設定した。トレンチ



第３図　試掘トレンチ配置図

は、北半が２×10m、南半が１×10mを基本的な大きさとし、25本を設定した。牧草地の部分は、深さ20cmほどで黄褐色土あるいは砂利層に達したが、雑木林の部分では、予想以上に遺物包含層が厚く堆積しており、深いところでは１m近くまで及んだ。

試掘調査の結果、北側及び中央のトレンチからの出土遺物は少なく、特に北側については遺跡の末端と考えられた。

検出遺構は、土坑、集石遺構であるが、集石を構成する礫には焼けているものがあることから、調理施設の可能性を指摘できた。また、竪穴住居跡と推測される遺構も検出された。これらは概ね試掘対象地区の南側に分布している状況であった。

出土遺物は、いわゆる繊維土器が多く、縄文時代早期末から前期前半に所属するものであることから、検出遺構についても同時期のものと考えられた。

以上より、出土遺物及び発見遺構のない北側を除いた部分が遺跡の範囲であり、開発予定地に占める面積は約3,000㎡であった。

第４章　本調査に至る経過と調査方法

第１節　調査に至る経過

試掘調査を行なった結果、計画路線内のうち、段丘平坦面の南部分、開発予定地の約3,000㎡について遺跡であることが明確となった。この資料をもとに原町建設事務所と遺跡の取り扱いについて協議したところ、工法対応は困難であることからこの部分について面的な発掘調査を実施することとなった。

また、本調査対象地の北端の東側部分について、付替え後の道路と当時の現道との合流地点となるため、平成５年度に改良工事の予定である旨の通知があった。このため、当該部分についての協議を行なったところ、同様に工法対応は困難であることから、平成５年度に発掘調査を実施することになった。

調査及び整理体制は以下のとおりであった。

平成４年度（第１次調査）

調査期間　平成５年２月12日～３月25日

調査面積　約３，０００㎡

調査主体及び担当　原町市教育委員会（教育長　渡部秀夫）

調査協力者　玉川一郎（福島県立原町高等学校教諭）　高荒淳　原充広　丸山泰徳
（財）福島市振興公社文化財調査室

発掘作業員　佐々木隆　牛来由美子　荒川幸雄　荒川幸子　宇佐見実　宇佐見茂子
岩本等　佐藤勝久　古内厚　古内トクイ　米津豊　豊田晃　追野久子
西和夫　桜喜代子　志賀秀夫　福田正治　瀧澤輝雄　阿部武雄　高田律子
北原洋　佐々木信之　紺野昭義

事務局　原町市教育委員会文化課　課長　佐藤一男　係長　青田富雄
係員　平田良親　武田耕平　齋藤直之

平成５年度（第２次調査）

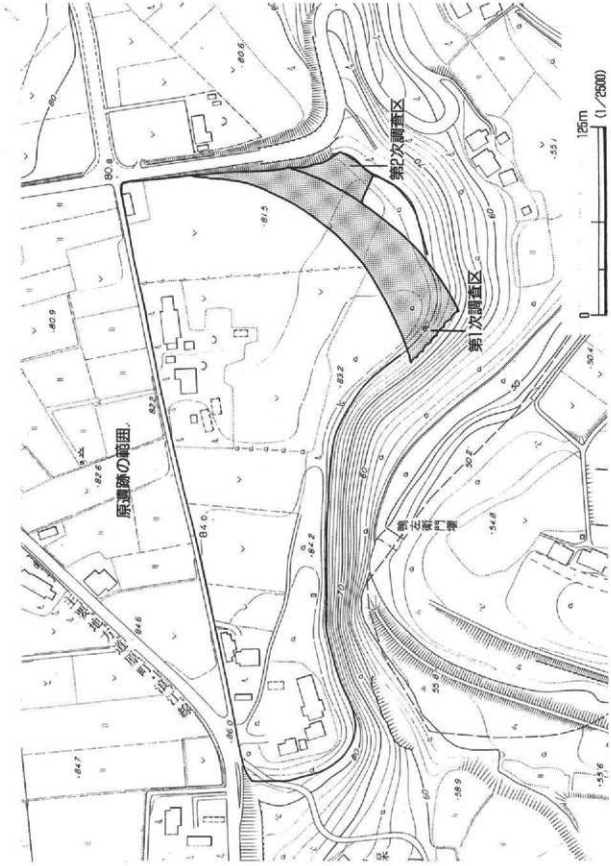
調査期間　平成５年10月19日～11月24日

調査面積　約７００㎡

調査主体及び担当　原町市教育委員会（教育長　渡部秀夫）

発掘作業員　佐久間三雄　但野八重子　相良英樹　阿部定雄　福村昭衛　押野己之助
紺野昭義　阿部定雄　佐藤徹　諏佐忠男　新舘新男　松本武雄　松本ハツノ
渡辺辰男

整理作業員　太田正子　遠藤和子　寺内美智子　古谷洋子　山本恵子



第４図　調査範囲図

事務局　　原町市教育委員会文化課　　課長　佐藤一男　　係長　鈴木吉久
　　係員　平田良親　武田耕平　齋藤直之

平成６年度（遺物整理及び報告書作成）
調査期間　　平成６年７月13日～平成７年２月22日
調査主体及び担当　　原町市教育委員会（教育長　渡部秀夫）
整理作業員　　太田正子　遠藤和子　寺内美智子　古谷洋子　山本恵子
事務局　　原町市教育委員会文化課　　課長　佐藤一男　　係長　鈴木吉久
　　係員　平田良親　武田耕平　齋藤直之

第２節　調査方法

第１次調査では、北半を調査終了させてから南半の調査を行なった。表土剝ぎは重機で行なった。諸事情により調査期間が極度に限定されたため、遺構検出後の掘り下げには草ケズリを多用した。また、南半では、第２層の除去も重機を用いた。このことにより、失われてしまった遺物も多いと推測される。遺構の掘り込みも北半同様、草ケズリを用いた。

遺物の取り上げ及び測量のため、４ｍ方眼のグリッドを設定した。グリッド設定にあたっては、道路のセンター杭２箇所とを２点を結んだ線を基準とした

掘り下げは層位ごとに行ない、出土遺物の取り上げは層位とグリッドを記録して行なった。記録にあたっては基本土層は「Ｌ」、遺構内覆土は「ℓ」の略号を用い、例えば基本土層の第１層は「ＬＩ」、覆土第１層は「ℓ１」のように表記した。

遺構平面図の作成は簡易遣り方による測量で行なった。縮尺は原則的に１／２０とした。

写真は35㎜のモノクロフィルムとカラーフィルム及びカラーリバーサルフィルムで撮影を行なった。

第２次調査では重機により表土剝ぎをおこなった後、第１次調査に合わせてグリッドを配置した。遺物の取り上げ、測量及び写真撮影は第１次調査と同様の方法で行なった。遺構の番号は第１次調査からの通し番号を付した。

第５章　発見された遺構

第１節　基本層序

基本的な土層の層順・層厚は調査区の北半と南半では違っている。北半では、開墾により、南半で存在する土層が失われているものと考えられる。南半では、遺物及び遺構の包含される土層は、概ね４層に分けることができた。

第１層（ＬⅠ）：表土。厚さは25cm前後を測る。
第２層（ＬⅡ）：黒褐色土。しまりやや弱い。遺物包含層。厚さ、南半で40～50cmを測る。北半ではほとんど見られない。
第３層（ＬⅢ）：暗褐色土。しまりやや弱い。遺物包含層。厚さ、20cm前後を測る。
第４層（ＬⅣ）：褐色土。砂質。しまりやや弱い。遺物包含層。厚さ、10cm前後を図る。
第５層（ＬⅤ）：黄褐色土。砂質。厚さは一定していない。本層の下は砂礫層となる。

第２節　竪穴住居跡

発見された遺構のうち、後述の土坑よりも規模が大きく、底面がある程度平坦であるものを竪穴住居跡とした。ただし、炉を有するものはほとんどない。柱穴についても、底面が砂質の第４層及び第５層にあるためか、底面を掘り下げた調査を行なってもほとんど検出できなかった。

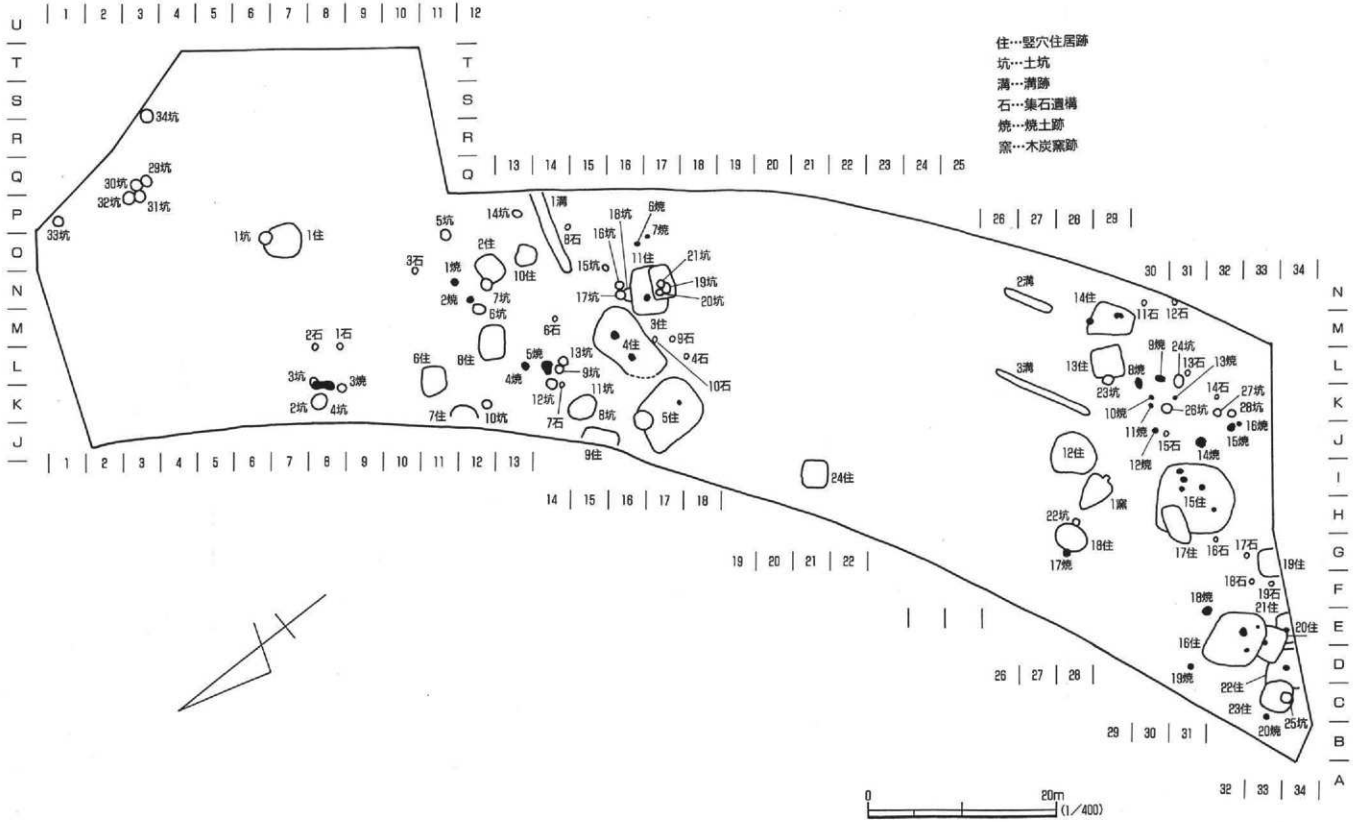
竪穴住居跡は、24軒検出されている。検出面は第３層及び第４層であるが、本来の遺構構築面は第２層中と推定される。このうち覆土中より縄文土器が出土している遺構がいくつかあるが、縄文土器の多くは、いわゆる繊維土器であることから、遺構の時期は、縄文時代早期末葉から前期前葉ごろと考えられる。

第１号住居跡

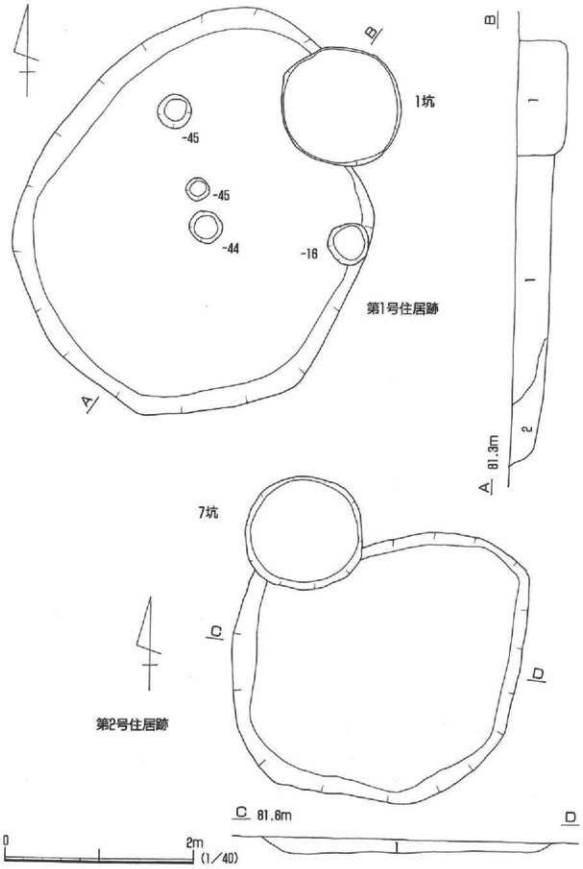
Ｏ－７に位置する。第１号土坑に切られている。平面形はほぼ楕円形を呈する。大きさは、長軸で約430cm、短軸で約360cmを測る。底面より小穴が４箇所検出された。炉はない。

覆土は２層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は暗褐色土で、両層とも炭粒を少し含んでいる。ともに自然堆積と思われる。

遺物は縄文土器が少数出土している。



第５図　原遺跡遺構分布図



第６図　第1・2号住居跡

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉に比定できる。

第２号住居跡

Ｎ・Ｏ－12に位置する。第７号土坑に切られている。平面形は隅丸方形を呈する。大きさは長軸で約310cm、短軸で約290cmを測る。柱穴及び炉は検出されなかった。

覆土は暗褐色土の単層である。自然堆積と思われる。

遺物は出土していない。

検出状況及び覆土が出土遺物のある他の住居跡と同様であることから、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉と推定される。

第３号住居跡

Ｎ－16･17に位置する。第11号住居跡、第15・18号土坑に切られている。平面形はほぼ長方形を呈する。大きさは、長軸で約505cm、短軸で約375cmを測る。底面から壁にかけて柱穴４箇所、土坑状小穴１箇所が検出された。この他、第11住居跡の東壁及び第21号土坑底面より検出されたピットは、本遺構で検出された柱穴とほぼ対照的な位置にあることから、本遺構に伴う柱穴と推定される。床面中央やや西寄りには地床炉が確認された。炉の大きさは約70cm四方である。炉の西側には石皿があり東側からは土器片が出土している。

覆土は褐色土の単層で、炭粒を微量含む。均質な堆積を示しているため、自然堆積と思われる。

遺物は縄文土器が少数と石皿１点が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉に比定できる。

第４号住居跡

Ｌ・Ｍ－16に位置する。北西角を倒木痕に切られているが、平面形はほぼ隅丸の長方形を呈する。大きさは、長軸で約905cm、短軸で約520cmを測る。底面からピットが５箇所検出された。また、焼土が２箇所確認された。西側は90×70cm、東側は100×100を測る。焼け方は弱く硬化面はない。

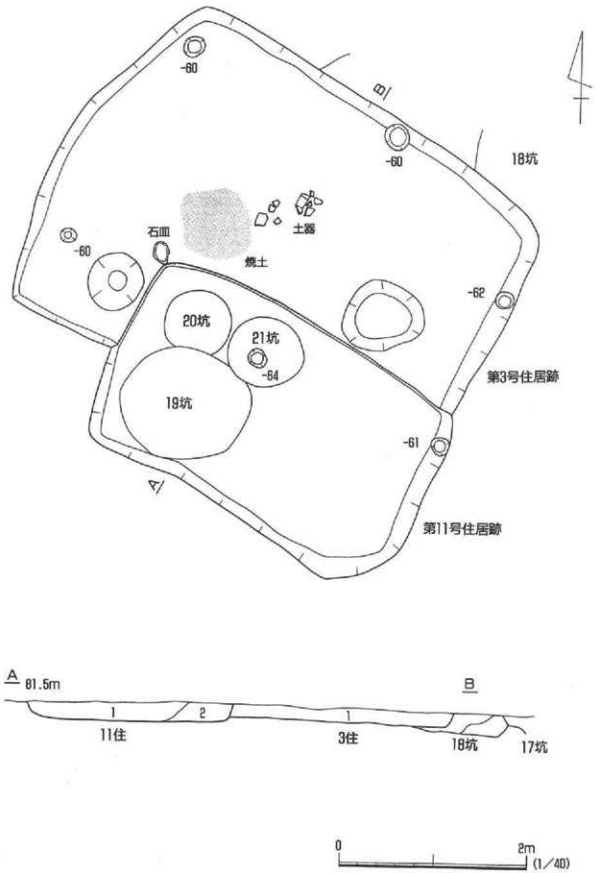
覆土は３層に分層できた。第１層は黒褐色砂質土、第２層は暗褐色砂質土、第３層は褐色砂質土である。いずれも均質な堆積であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

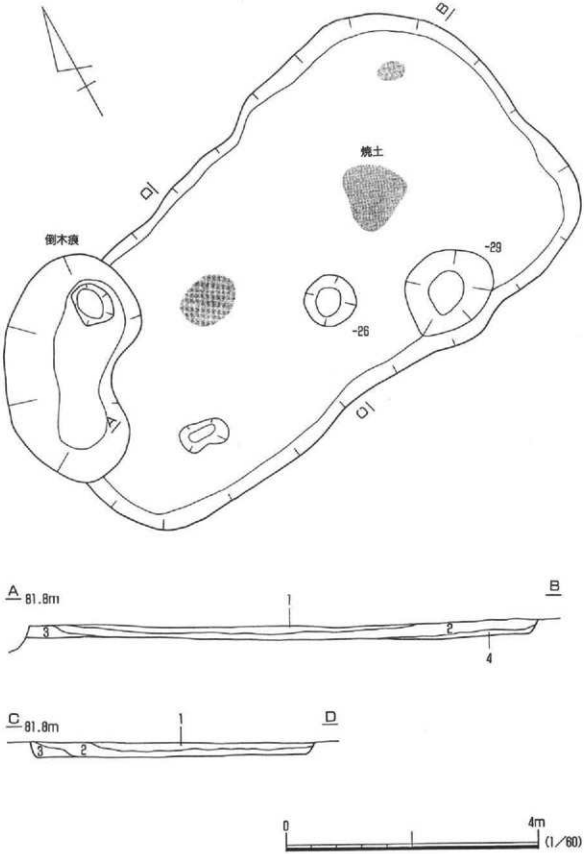
出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉に比定できる。

第５号住居跡

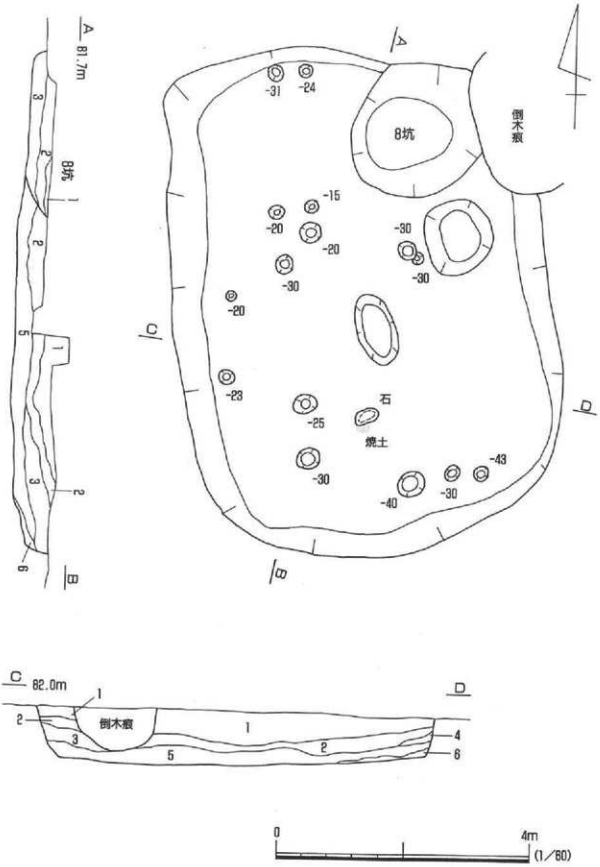
Ｊ・Ｋ－17に位置する。北角を第８号土坑及び倒木痕に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈する。大きさは、長軸で約820cm、短軸で約590cmを測る。底面からピットが17箇所検出された。また東寄りに地床炉が１箇所確認できた。大きさは直径が20cmで、やや窪んでおり被



第７図　第3・11号住居跡



第８図　第4号住居跡


A
81.7m
B
8坑
3
2
1
2
5
1
2
3
6
A
B
C
D
8坑
倒木痕
-31
-24
-15
-20
-20
-30
-30
-30
-20
-23
-25
石
焼土
-30
-40
-30
-43
C
82.0m
D
1
2
倒木痕
1
3
2
4
5
6
0
4m
(1／60)

第９図　第5号住居跡

熱による赤色硬化面が認められた。北側には自然礫が被さるようにして検出された。

覆土は６層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は暗褐色土、第３・４層は褐色土、第５層は暗褐色土、第６層は褐色土である。いずれも均質な堆積であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉に比定できる。

第６号住居跡

Ｋ・Ｌ－11に位置する。平面形は不整形である。大きさは、長軸で約335cm、短軸で約285cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

覆土は５層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は暗褐色土、第３層は第２層より暗い暗褐色土、第４層は暗褐色砂質土、第５層は暗褐色粘質土である。第１層から第４層は均質な堆積であることから、自然堆積と考えられる。第５層は床面の汚れと考えられる。

遺物は第１層中、床面から25cm前後の高さに大木２式土器が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代前期前葉頃に比定できる。

第７号住居跡

Ｋ－11・12に位置する。部分的な調査のため、平面形の詳細は不明である。大きさは、調査した部分で南北で約335cm、東西で約150cmを測る。礫の入ったピットが１箇所検出された。

覆土は８層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は暗褐色土、第３層は褐色粘質土、第４層は暗褐色土、第５層は褐色粘質土、第６層は暗褐色土、第７層は暗褐色砂質土、第８層は暗褐色粘質土である。第１層から第７層は均質な堆積であることから自然堆積と考えられる。第８層は床面の汚れと考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第８号住居跡

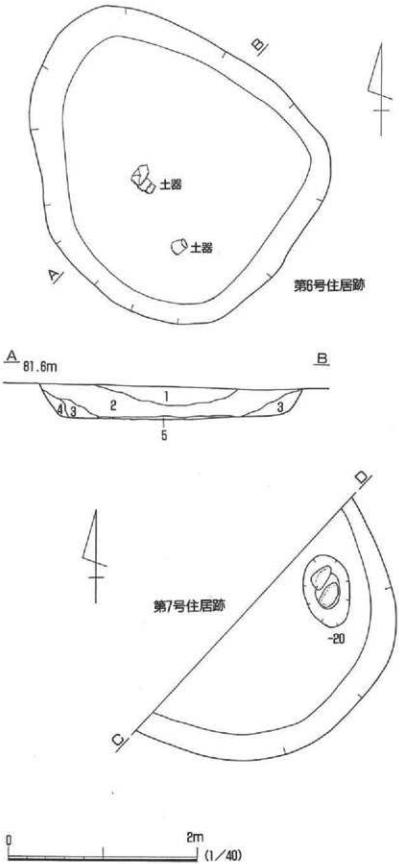
Ｌ・Ｍ－12に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈する。大きさは長軸で約390cm、短軸で約300cmを測る。床面で、ピットになりそうな直径10cm前後の土の汚れた部分が12箇所検出されたが、断ち割り調査の結果、ピットと確認できたものはなかった。炉は検出されなかった。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第９号住居跡

Ｊ－15に位置する。部分的な調査であるが、平面形は隅丸長方形を呈すると推定される。大きさは調査した部分で、長軸で約400cm、短軸で約125cmを測る。床面で、ピットになりそうな



第10図　第6・7号住居跡

直径20cm弱の土の汚れた部分が６箇所検出されたが、断ち割り調査の結果、ピットと確認できたものは４箇所であった。炉は検出されなかった。

覆土は３層に分層できた。第１層は暗褐色土で焼土を微量含むんでいる。第２層は暗褐色土で黄褐色砂質土粒・塊を多く含んでいる。第３層は褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第10号住居跡

Ｏ－13に位置する。平面形は台形を呈する。大きさは、長軸で約245cm、短軸で約235cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

遺物は縄文土器が少数出土している。また、住居跡の南側から、床面直上で拳大の川原石が13個出土した。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第11号住居跡

Ｎ－17に位置する。第３号住居跡を切っている。第19～21号土坑に切られている。平面形は隅丸長方形を呈すると推定される。大きさは、長軸で約370cm、短軸で約220cmを測る。床面及び第21号土坑の底面から２箇所のピットが検出されたが、発見された位置を考慮すると、第３号住居跡に付属するものと考えられる。炉は検出されなかった。

覆土は２層に分層できた。第１層は褐色土、第２層は暗褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

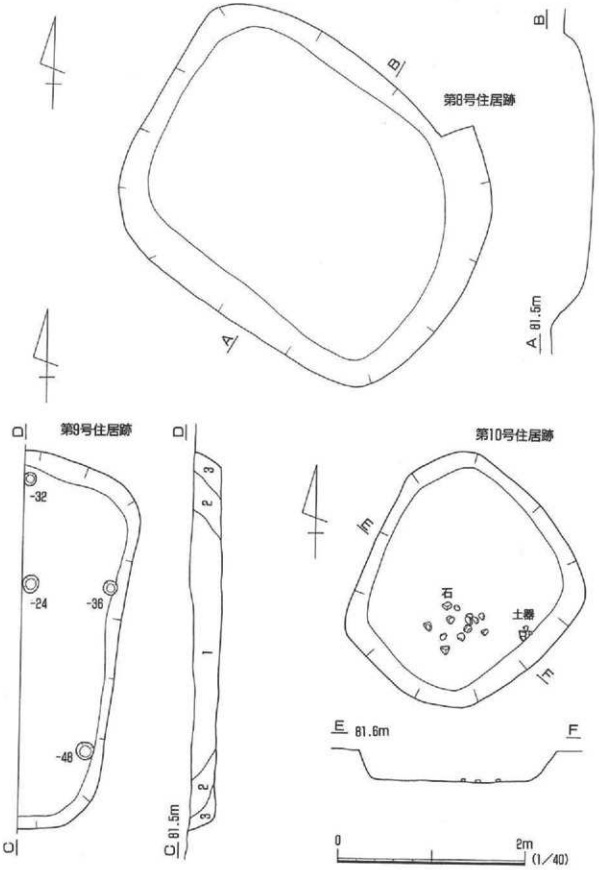
第12号住居跡

Ｉ・Ｊ－28に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、長軸で約250cm、短軸で約240cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

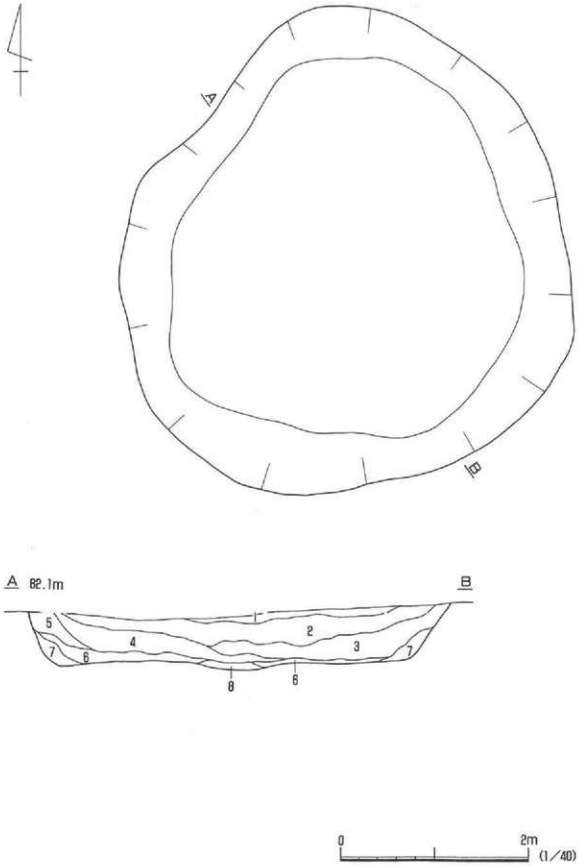
覆土は８層に分層できた。第１層は黒褐色砂質土、第２層は褐色砂質土、第３層は暗褐色土、第４層は第３層よりも暗い暗褐色土、第５層は暗褐色土、第６層は黄褐色土、第７層は黄褐色砂質土、第８層は黒褐色土である。第１層から第７層までは均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。第８層は床面の汚れと考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。



第11図　第8・9・10号住居跡



第12図　第12号住居跡

第13号住居跡

Ｌ－29に位置する。第23号土坑に切られている。平面形はほぼ正方形を呈する。大きさは、長軸で約330cm、短軸で約280～320cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黒褐色土で焼土を含んでいる。第３層は黄褐色土、第４層は黒褐色砂質土である。第１層から第３層までは、砂や小石が混ざっているが、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。第４層は床面の汚れと考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第14号住居跡

Ｍ－29に位置する。北側で床面及び壁が明確に把握できなかった。確認できた部分の平面形はほぼ長方形を呈する。大きさは、長軸で約500cm、短軸で約250～390cmを測る。床面より焼土が２箇所確認できた。大きさは、北側で75×100cm、南側で40×95cmを測る。焼け方は弱く、被熱による赤色硬化面は形成されていない。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の住居跡と同様の堆積状況であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第15号住居跡

Ｈ・Ｉ－31・32に位置する。調査の過程で、第17号住居跡との重複があることがわかったが、新旧関係は把握できなかった。また、東西及び南北の土層観察から、さらに別の重複があった可能性が強いと考えられる。平面形は不整な方形を呈する。大きさは長軸で約800cm、短軸で約680cmを測る。床面から、ピット24箇所、焼土５箇所が検出された。焼土には赤色硬化面は認められなかった。

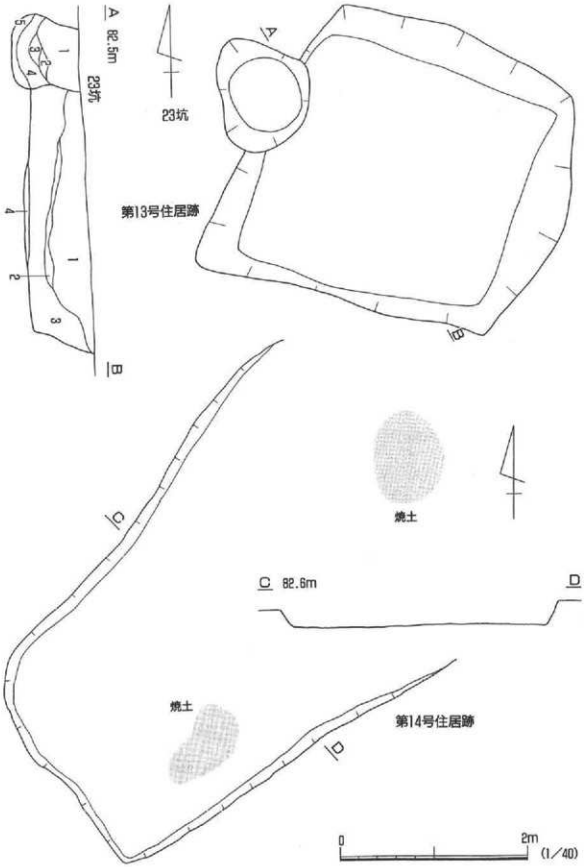
覆土は５層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は第１層より明るい黒褐色土、第３層は暗褐色土、第４層は褐色土、第５層は黄褐色砂である。このうち第１層、第２層は本遺構よりも新しい遺構の覆土の可能性を指摘できる。いずれも、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が出土している。

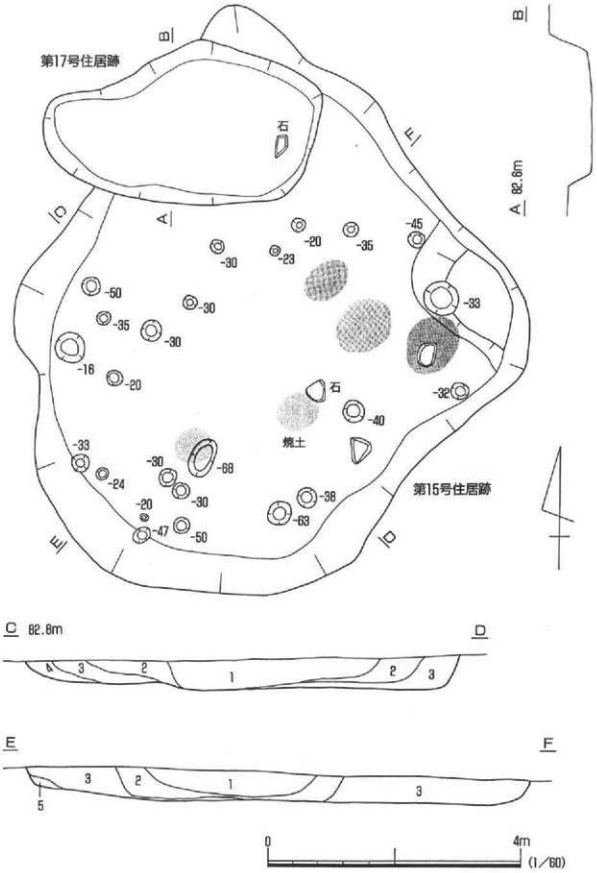
出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第16号住居跡

Ｄ・Ｅ－32に位置する。第20号住居跡を切っている。平面形は不整な長方形を呈する。大きさは、長軸で約680cm、短軸で約520cmを測る。床面から、ピット23箇所、焼土３箇所が検出された。焼土には赤色硬化面は認められなかった。



第13図　第13・14号住居跡



第14図　第15・17号住居跡

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土、第３層は黄褐色土、第４層は黒褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第17号住居跡

Ｈ－31に位置する。第15号住居跡の調査の過程で確認された遺構で、第15号住居跡との新旧関係は把握できなかった。平面形は不整な長方形を呈する。大きさは、長軸で約430cm、短軸で約260cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

覆土は１層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黄褐色砂質土である。いずれも、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第18号住居跡

Ｇ－28に位置する。南側で土坑を切っており、北側では焼土に切られている。平面形は楕円形を呈する。大きさは、長軸で約375cm、短軸で約295cmを測る。床面からピットが６箇所検出された。炉は確認されなかった。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土、第３層は黄褐色土、第４層は黒褐色土である。第１層から第３層までは、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。第４層は床面の汚れと考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第19号住居跡

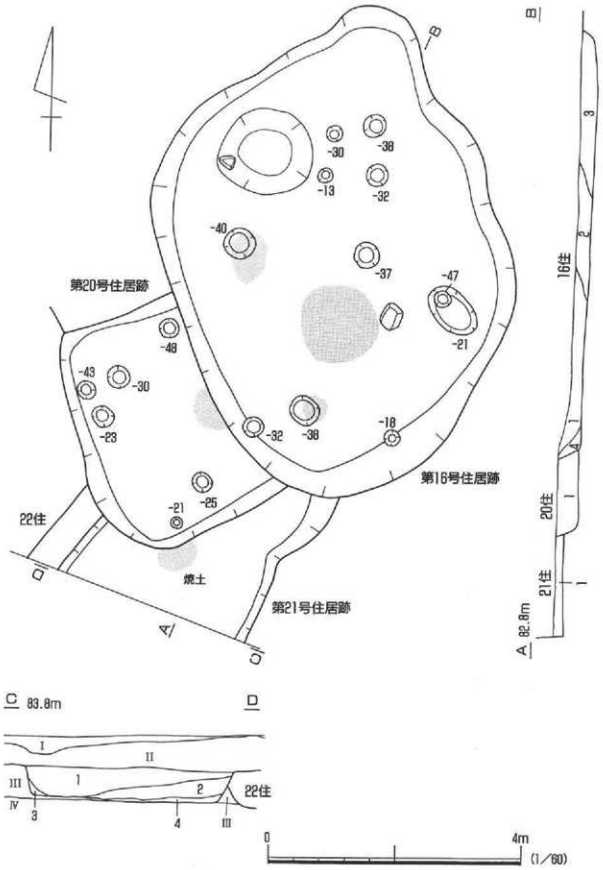
Ｇ－33に位置する。部分的な調査であるが、平面形は隅丸の方形と推定される。大きさは、南北で約300cm、東西で約190cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。

遺物は出土していない。

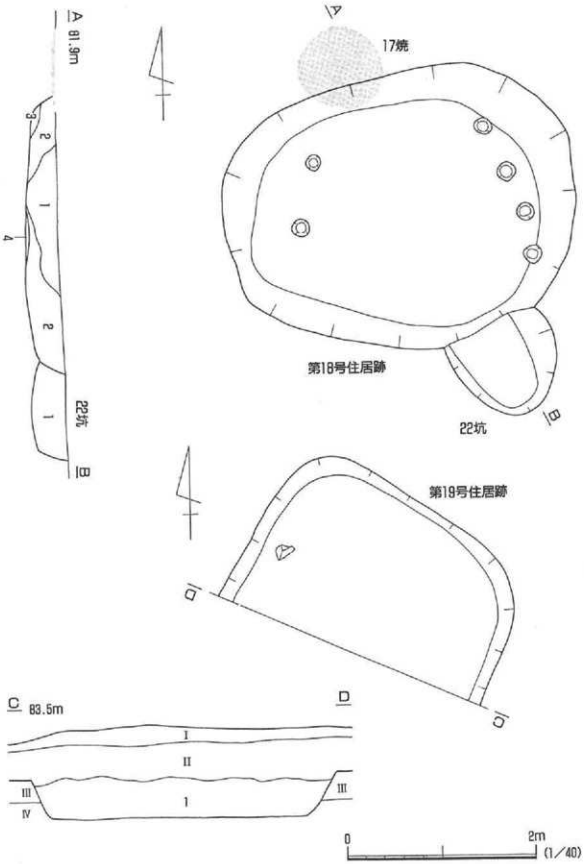
本遺構の時期は、出土遺物のある他の住居跡と同様の堆積状況であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第20号住居跡

Ｄ・Ｅ－33に位置する。第21・22号住居跡を切っており、第16号住居跡に切られている。平面形は方形を呈するものと推定される。大きさは、南北で約370cm、東西で約220cmを測る。ピットは確認されなかった。床面より焼土が１箇所検出されたが、第16号住居跡に壊されている状況であった。



第15図　第16・20・21号住居跡



第16図　第18・19号住居跡

覆土は褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、第16号住居跡よりも古いが、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第21号住居跡

Ｅ－34に位置する。第16・21号住居跡に切られている。調査した部分から、平面形は長方形を呈するものと推定される。大きさは、南北で約250cm、東西で約300cmを測る。ピットは検出されなかった。床面より焼土が１箇所検出されたが、第21号住居跡に壊されている状況であった。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２・３層は褐色土、第４層は暗褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第22号住居跡

Ｄ－33・34に位置する。東側を第20号住居跡に、西側を第23号住居跡に切られている。平面形は、調査した部分から、長方形を呈するものと推定される。大きさは、南北で約400cm、東西で約425cmを測る。ピットは検出されなかった。床面より焼土が１箇所検出された。

覆土は３層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は第１層より暗い暗褐色土、第３層は褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第23号住居跡

Ｃ－33に位置する。東側で第22号住居跡を切っている。平面形は、不整な方形を呈する。大きさは長軸で約350cm、短軸で約340cmを測る。ピット及び炉は検出されなかった。床面の南寄りの部分は最近の攪乱により壊されている。

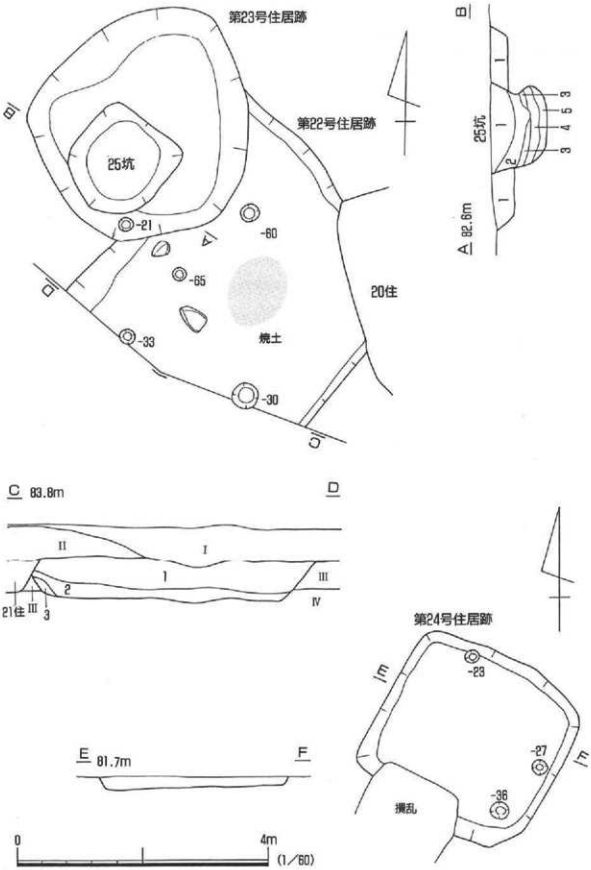
遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第24号住居跡

Ｉ－21に位置する。南側を最近の攪乱で壊されている。平面形は正方形を呈する。大きさは、南北で約290cm、東西で約285cmを測る。床面よりピットが３箇所検出された。炉は検出されなかった。

覆土は暗褐色の単層である。均質な堆積状況であることから自然堆積と考えられる。



第17図　第22・23・24号住居跡

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第３節　土坑

第１号土坑

Ｏ－６に位置する。第１号住居跡を切っている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径130cm、深さは54cmを測る。

覆土は、暗褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第２号土坑

Ｋ－８に位置する。平面形は楕円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がるいわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、長軸で190cm、短軸で155cm、深さは60cmを測る。

覆土は５層に分層できた。第１層は焼土まざりの暗褐色土、第２層は黒褐色土、第３層は暗褐色土まざりの黄褐色土、第４層は暗褐色土、第５層は黄褐色砂質土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第３号土坑

Ｌ－８に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは、直径90cm、深さは117cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。また、柱穴状のピットであることから、第４号土坑を含めて掘立柱建物跡の可能性が考えられたが、組合せのできるピットは周囲に発見されなかった。

第４号土坑

Ｋ－８に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは直径100～110cm、深さは115cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。また、柱穴状のピットであることから、第３号土坑を含めて掘立柱建物跡の可能性が考えられたが、組合せのできるピットは周囲に発見されなかった。

第５号土坑

Ｏ－11に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは115～120cm、深さは53cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第６号土坑

Ｍ・Ｎ－12に位置する。平面形は、上方では楕円形で、下方ではほぼ円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がっている。下方での大きさは直径80cm、深さは140cmを測る。

覆土は７層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黄褐色土まざりの暗褐色土、第３層は暗褐色土、第４層は３第層よりやや明るい暗褐色土、第５層は第３層よりやや暗い暗褐色土、第６層は第３層より明るい暗褐色土、第７層は褐色砂質土である。第３～５層には炭粒がやや多い。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第７号土坑

Ｎ－12に位置する。第２号住居跡を切っている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径120cm、深さは52cmを測る。

覆土は３層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黒褐色土、第３層は暗褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

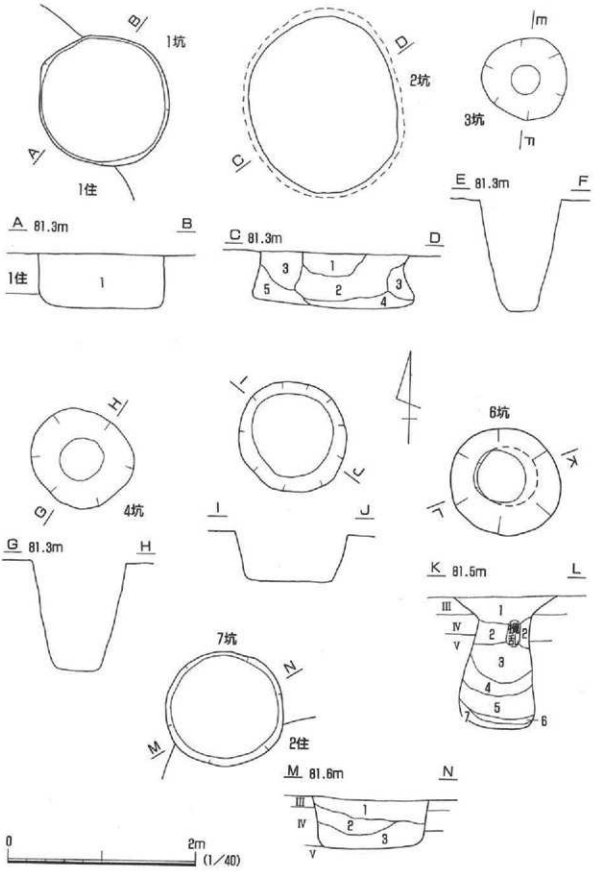
本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第８号土坑

Ｊ・Ｋ－16に位置する。第5号住居跡を切っている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径210～230cm、深さは40cmを測る。

覆土は３層に分層できた。第１層は黒褐色土、第２層は褐色土、第３層は暗褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。


1坑
1住
2坑
3坑
A 81.3m
B
C 81.3m
D
E 81.3m
F
4坑
G 81.3m
H
I
J
6坑
K 81.5m
L
7坑
2住
M 81.6m
N
0
2m
(1/40)

第18図　第1～7号土坑

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第９号土坑

Ｌ－14に位置する。第13号土坑に接している。平面形はほぼ円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がる、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径80cm、深さは58cmを測る。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土、第３層は黄褐色土を少し含む褐色土、第４層は砂混ざりの黄褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第10号土坑

Ｋ－12に位置する。東側をピットに切られている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約105～120cm、深さは46cmを測る。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黄褐色土を含む暗褐色土、第３層は黄褐色土、第４層は黄褐色砂質土である。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第11号土坑

Ｋ－15に位置する。平面形は楕円形を呈する。大きさは、長軸で約320cm、短軸で約230cm、深さは17cmを測る。

遺物は縄文土器が少数と石皿１点が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第12号土坑

Ｋ・Ｌ－14に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約100～115cm、深さは36cmを測る。

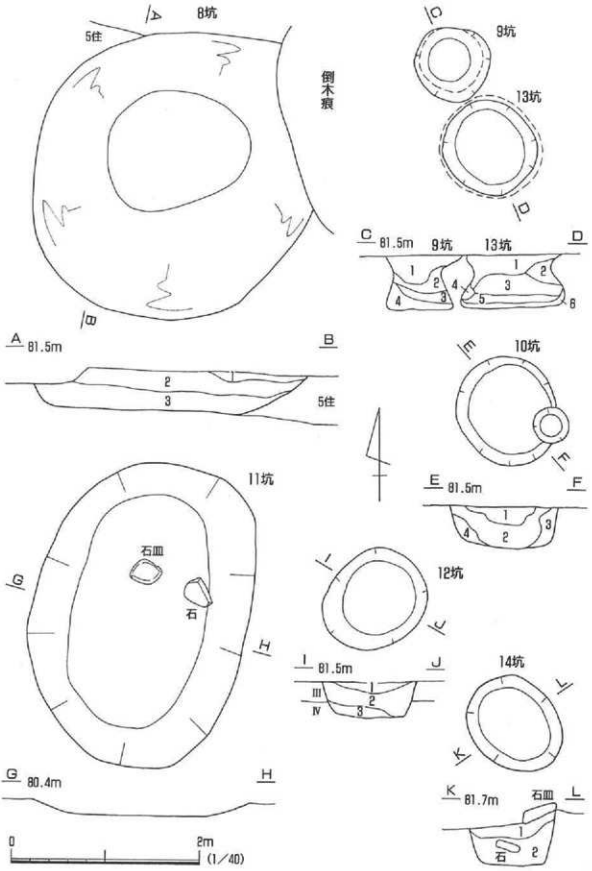
覆土は３層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は第層より暗い暗褐色土、第３層は黄褐色砂である。第１・２層には炭粒がやや多い。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第13号土坑

Ｌ－14に位置する。第９号土坑に接している。平面形はほぼ円形を呈する。断面形は、ロー



第19図　第8～14号土坑

ト状にすぼまり、下方でやや広がる、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径95～100㎝、深さは56㎝を測る。

覆土は６層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土、第３層は暗褐色土、第４層は褐色土、第５層は暗褐色土、第６層は黄褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第14号土坑

Ｐ－13に位置する。平面形は楕円形を呈する。大きさは、長軸で約110㎝、短軸で約90㎝、深さは50㎝を測る。

覆土は２層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黄褐色土である。

遺物は縄文土器が少数出土している。また、検出面で石皿が出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第15号土坑

Ｏ－15に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは、直径約95～100㎝、深さは40㎝を測る。

覆土は、黄褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第16号土坑

Ｎ－16に位置する。第17号土坑に接しいる。平面形は円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がる、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径約75㎝、深さは53㎝を測る。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第17号土坑

Ｎ－16に位置する。第16号土坑に接し、第18号土坑を切っている。平面形は円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がる、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径約110㎝、深さは76㎝を測る。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黒褐色土、第３層は暗褐色土、第４層は黒褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第18号土坑

Ｎ－16に位置する。第３号住居跡及び第17号土坑に切られている。平面形は円形を呈するものと推定される。大きさは、最大幅で約100cm、深さは22cmを測る。

覆土は２層に分層できた。２層ともに褐色土であるが、第２層の方が黄褐色土をより多く含んでいる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第19号土坑

Ｎ－17に位置する。第11号住居跡の床面で検出された。第20号土坑を切っており、第21号土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈する。断面形は、皿状を呈する。大きさは、直径約120～140cm、深さは約20cmを測る。

覆土は褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第20号土坑

Ｎ－17に位置する。第11号住居跡の床面で検出された。第19号土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約70cmを測る。

覆土は、黄褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

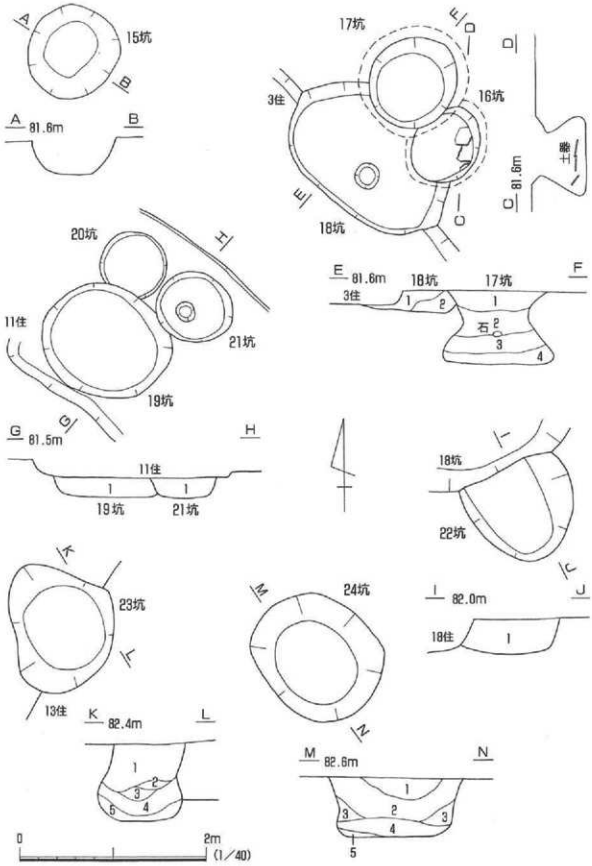
第21号土坑

Ｎ－17に位置する。第11号住居跡の床面で検出された。第19号土坑を切っている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約75～82cmを測る。

覆土は、暗褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。



第20図　第15～24号土坑

第22号土坑

Ｈ－28に位置する。第18号住居跡に切られている。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約130cm、深さは36cmを測る。

覆土は、暗褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第23号土坑

Ｌ－29に位置する。第13号住居跡を切っている。平面形は不整な円形を呈する。断面形は、ロート状にすぼまり、下方でやや広がる、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径約75cm、深さは74cmを測る。

覆土は５層に分層できた。第１層は黄褐色土を含む褐色土、第２層は褐色土、第３層は黄褐色土、第４層は褐色土、第５層は黄褐色砂質土である。いずれも、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第24号土坑

Ｋ・Ｌ－31に位置する。平面形は楕円形を呈する。大きさは、直径約150～180cm、深さは40cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の検出面よりやや下位で発見されたが、おおむね縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第25号土坑

Ｃ－34に位置する。第23号住居跡を切っている。平面形は不整な円形を呈する。断面形は、いわゆるフラスコ状を呈する。大きさは、直径約75～80cm、深さは95cmを測る。

覆土は５層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は黒褐色土、第３層は黄褐色土、第４層は暗褐色土、第５層は黄褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第26号土坑

Ｋ－30に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは、直径約125～135cm、深さは40cmを測

る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の検出面よりやや下位で発見されたが、おおむね縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第27号土坑

Ｋ－32に位置する。平面形は不整な円形を呈する。大きさは、直径約90～105cm、深さは49cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の検出面よりやや下位で発見されたが、おおむね縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第28号土坑

Ｋ－32に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。大きさは、直径約130cm、深さは58cmを測る。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の検出面よりやや下位で発見されたが、おおむね縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第29号土坑

Ｑ－３に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは、直径で約110～125cm、深さは30cmを測る。

覆土は２層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土である。いずれも、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第30号土坑

Ｑ－３に位置する。第31号土坑を切っている。平面形は円形を呈する。大きさは直径で約125cm、深さは40cmを測る。

覆土は４層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土、第３層は暗褐色土、第４層は褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第31号土坑

Ｐ－３に位置する。第30号土坑に切られており、第32号土坑を切っている。平面形は、円形を呈する。大きさは、直径で約135cm前後、深さは45cmを測る。

覆土は２層に分層できた。第１層は暗褐色土、第２層は褐色土である。いずれも均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第32号土坑

Ｐ－３に位置する。第31号土坑に切られている。平面形は円形を呈する。大きさは、直径で約125cm前後、深さは13cmを測る。

覆土は褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第33号土坑

Ｐ－１に位置する。平面形は円形を呈する。大きさは、直径で約100～110cm、深さは30cmを測る。

覆土は褐色土の単層である。均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

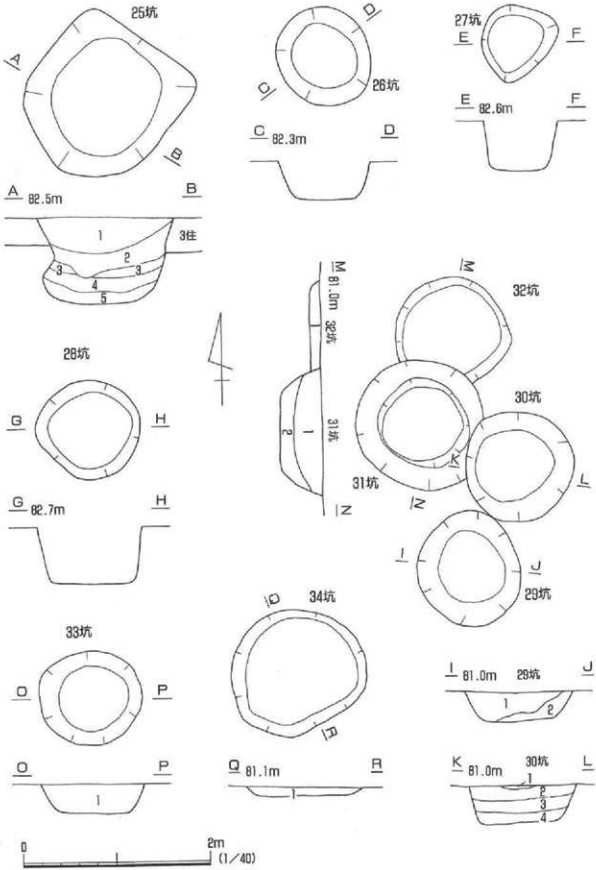
第34号土坑

Ｒ－４に位置する。平面形は不整な円形を呈する。大きさは、長軸で約145cm、短軸で約125cm、深さは10cmを測る。

覆土は暗褐色土の単層で、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、出土遺物のある他の遺構の覆土の堆積状況と同様であることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。



第21図　第25～34号土坑

第４節　溝跡

溝跡は３条発見された。

第１号溝跡

Ｏ・Ｐ－14に位置する。長さは約830cm、最大幅は約130cm、深さは約20cmを測る。

覆土は褐色の単層で、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、覆土が褐色土の自然堆積と推定されることから、縄文時代前期頃と考えられる。

第２号溝跡

Ｋ・Ｌ－26～28に位置する。長さは約550cm、最大幅は約110cm、深さは約30cmを測る。

覆土は褐色の単層で、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

本遺構の時期は、覆土が褐色土の自然堆積と推定されることから、縄文時代前期頃と考えられる。

第３号溝跡

Ｍ・Ｎ－26・27に位置する。長さは約1200cm、最大幅は約120cm、深さは約20cmを測る。

覆土は褐色の単層で、均質な堆積状況であることから、自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器が少数出土している。

本遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

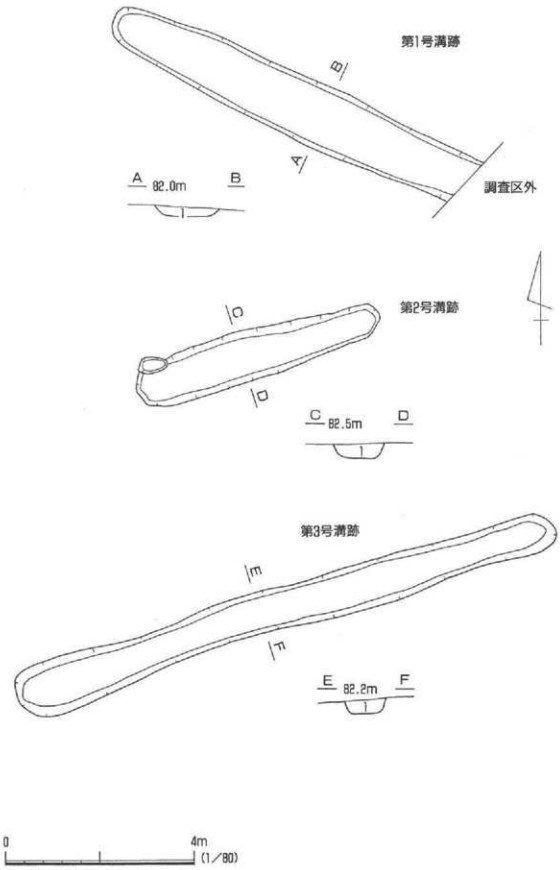
第５節　集石遺構

北半に９基、南半に９基発見された。第１・２・10・14号集石遺構を除いた他のものは、円形かやや楕円形の掘り方をもち、集石を構成している礫は若干焼けている状況が観察できる。

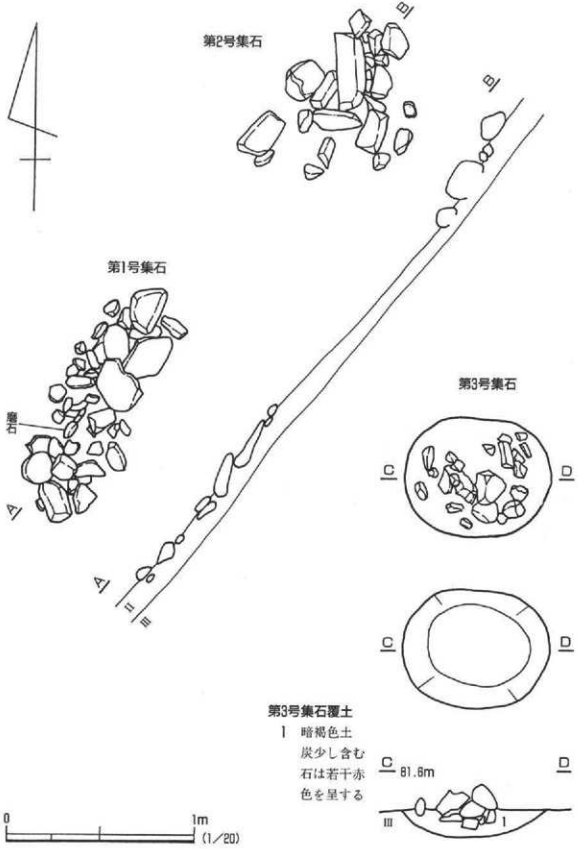
遺構の時期は、検出面が出土遺物のある住居跡とほぼ同じであることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。第５号は欠番である。

第６節　焼土跡

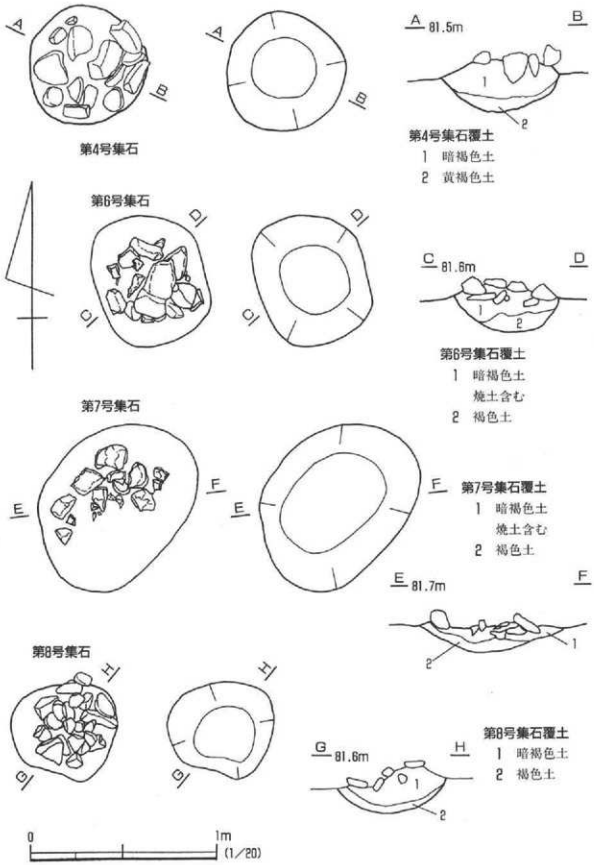
北半に７箇所、南半に13箇所発見された。いずれも被熱による硬化面はなく焼け方は弱い。



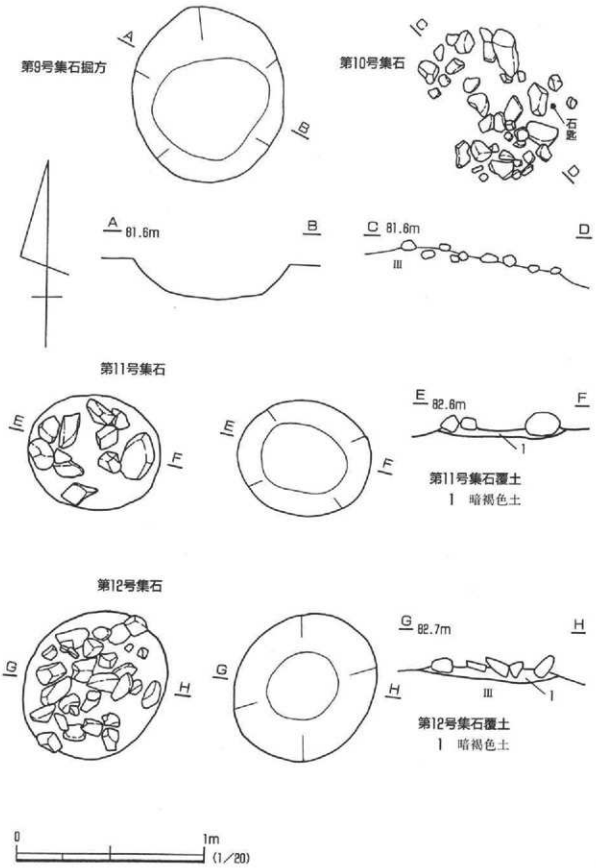
第22図　第1～3号溝跡



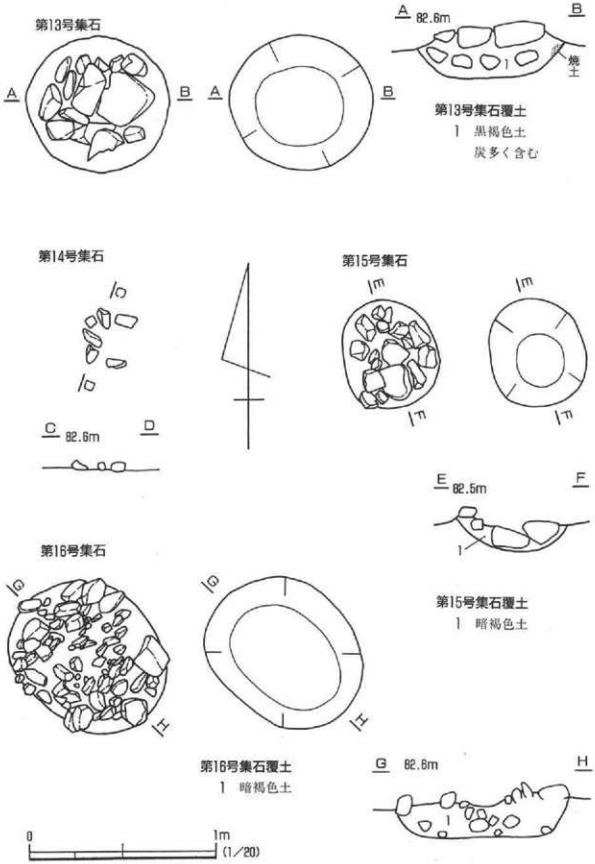
第23図　第1～3号集石遺構



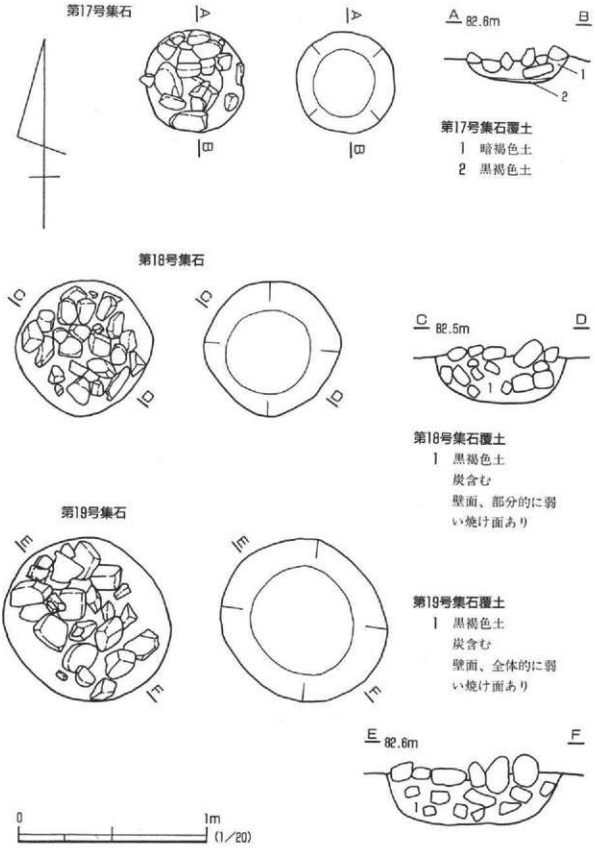
第24図　第4・6～8号集石遺構



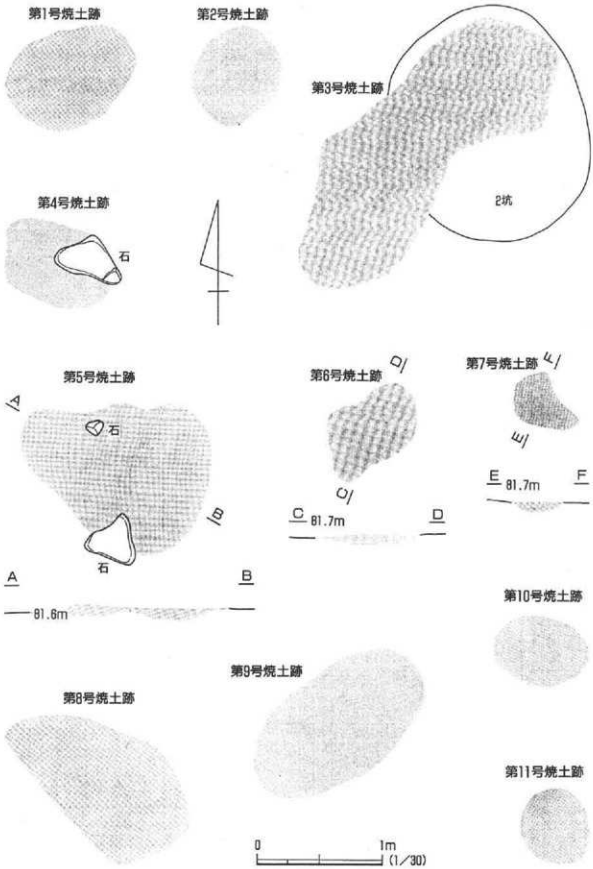
第25図　第9～12号集石遺構



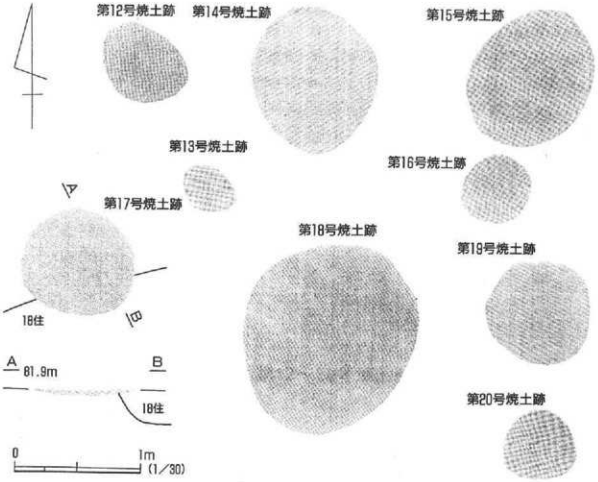
第26図　第13～16号集石遺構



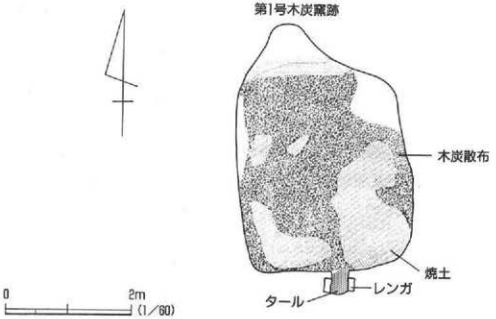
第27図　第17～19号集石遺構



第28図　第1～11号焼土跡



第29図　第12～20号焼土跡



第30図　第1号木炭窯跡

遺構の時期は、検出面が出土遺物のある住居跡とほぼ同じであることから、縄文時代早期末葉から前期前葉頃と推定される。

第７節　木炭窯跡

第１号木炭窯跡

Ｈ・Ｉ－28・29に位置する。底面のみ確認できた。煙出し部には、煉瓦が埋設されていた。長さは約420cm、幅は約280cmを測る。

遺構の時期は、使用されている煉瓦が現代のものであることから、現代と考えられる。

第6章　まとめ

原遺跡における縄文時代の集落構成について

今回の発見遺構のうち現代の木炭窯跡を除いた遺構は、出土遺物や検出面、検出状況及び覆土の堆積状況から、おおむね縄文時代早期末から前期前葉頃と推定される。

遺構の集中する部分は大きく2箇所に分かれている。北端の土坑群を除けば、北側では竪穴住居跡12棟、土坑21基、溝跡1条、集石遺構9基、焼土跡7箇所に対し、南側では竪穴住居跡12棟、土坑6基、溝跡2条、集石遺構9基、焼土跡13箇所の構成になっている。これらは、重複関係があることからみても、集落が営まれた時間の経過の結果としてあらわれたものであるとともに、集落を構成する場が2箇所に分かれていたことを示している。

一方、構成内容についてみてみる。住居跡には、炉を有するものと持たないものがあり、前者の方が比較的長方形に近い形をしている。焼土跡は、屋外炉として、炉のない住居跡を補完する遺構として、当該期にはたびたび発見される遺構である。また、原遺跡での特徴として、集石遺構がある。屋外にあり、ほぼ円形の掘り方を持つこの遺構には、火を受けたと認められる礫が集積しており、一種の調理施設であったと想像されるものもあるが、礫の焼け方は弱く、覆土は明確に人為的なものとは判断できない。この種の遺構の性格の解明にあたっては、今後、問題意識を持った調査が必要とされる。この他、土坑の中には、縄文時代中期のフラスコ状土坑と同様に上方が狭く、下方が広く作られているものが見うけられる。

原町市域では、当該期以前の住居跡や集落は知られていないことから、当地域でも、全国的な他の遺跡と同様、この時期になり、人々の定住化や集落の拡大があったことを、今回の調査は明確にしている。また、この時期既に、各種の遺構が有機的に関連して集落を構成していたことがうかがえる。

図　　版

1　原遺跡遠景（八重米坂より望む）

2　試掘　2トレンチ

第1図版　遺跡・試掘

3　試掘　13トレンチ

4　試掘　14トレンチ

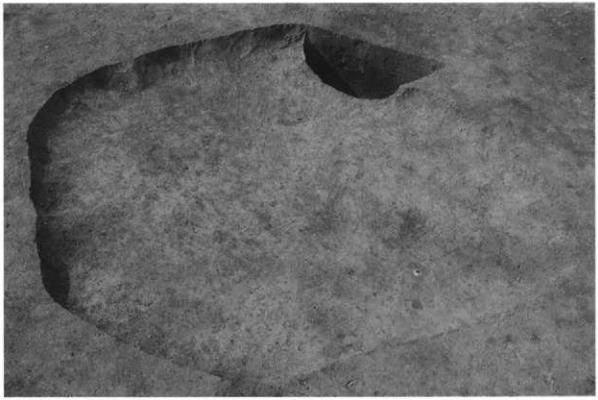
第2図版　試掘

5　第2次調査区（北から）

6　第2次調査区（南から）

第３図版　第2次調査区

7　第1号住居跡



8　第2号住居跡

第4図版　住居跡（1）

9　第3・11号住居跡

10　第3号住居跡　炉跡

第5図版　住居跡（2）

11　第4号住居跡

12　第5号住居跡

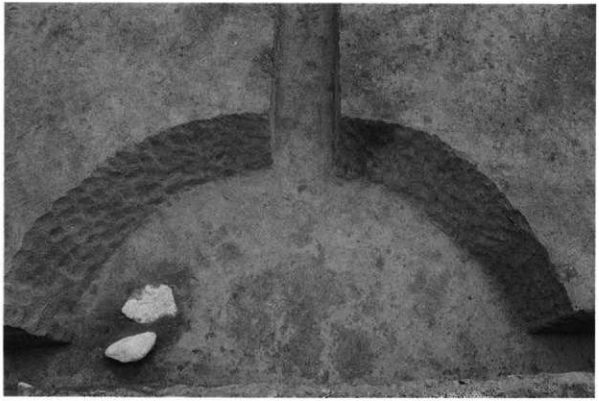
第６図版　住居跡（3）

13　第5号住居跡

14　第5号住居跡　炉跡

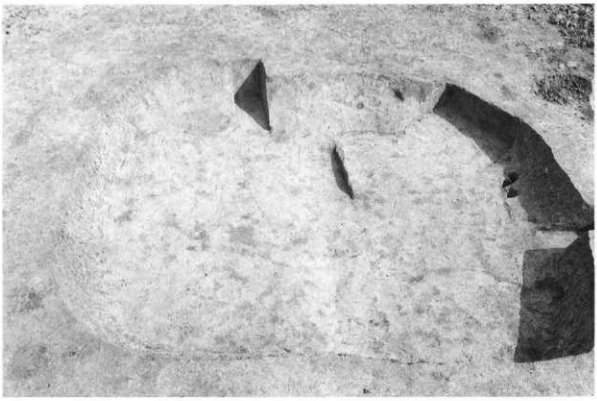
第７図版　住居跡（4）

15　第6号住居跡



16　第7号住居跡

第８図版　住居跡（5）

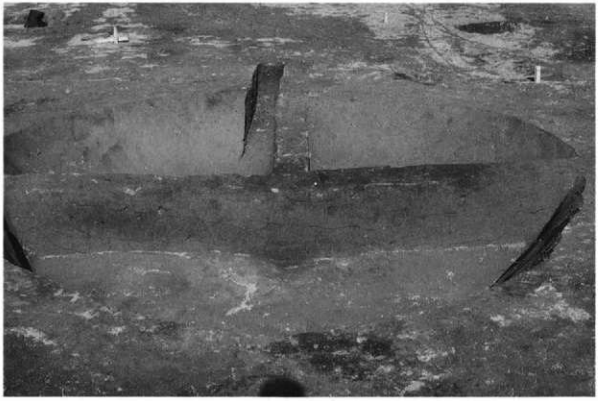


17　第8号住居跡

18　第9号住居跡

第９図版　住居跡（6）

19　第10号住居跡



20　第12号住居跡

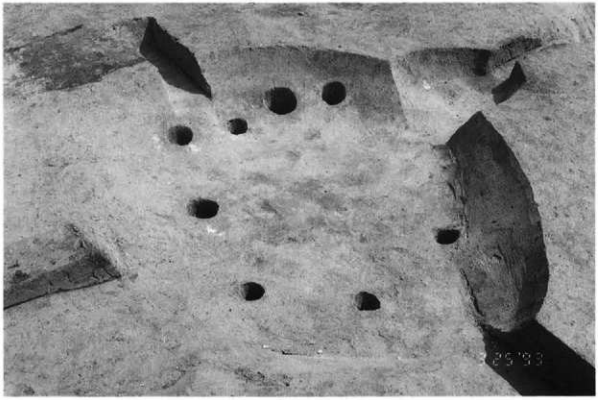
第10図版　住居跡（7）

21　第13号住居跡

22　第14号住居跡

第11図版　住居跡（8）

23　第15・17号住居跡



24　第18号住居跡

第12図版　住居跡（9）

25　南東部住居跡群

26　第19号住居跡

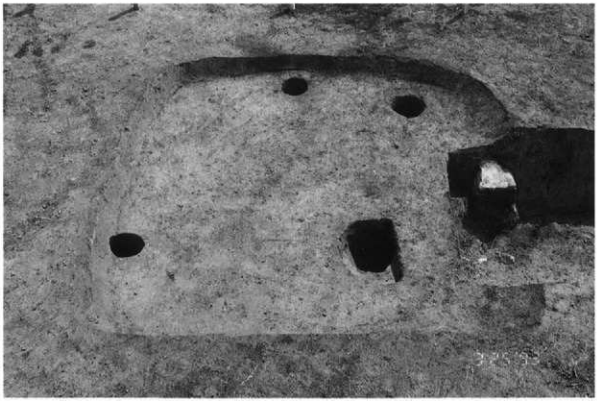
第13図版　住居跡（10）

27　南端住居跡群・集石群

28　第21～23号住居跡

第14図版　住居跡（11）

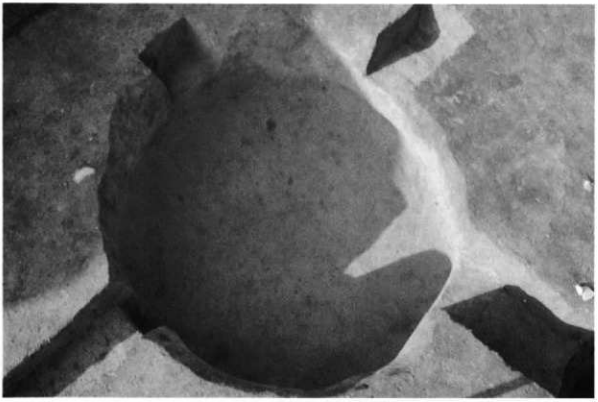
29　第23号住居跡



30　第24号住居跡

第15図版　住居跡（12）

31　第1号土坑



32　第2号土坑

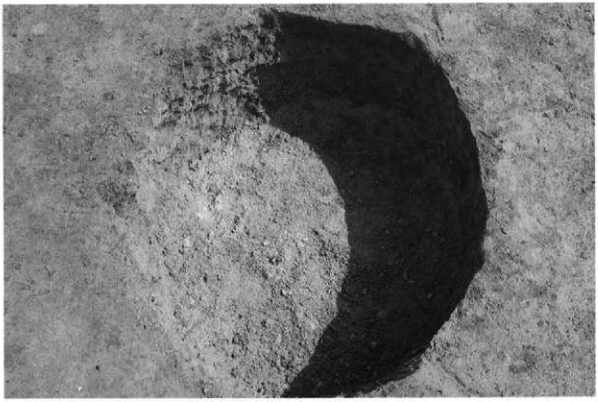
第16図版　土坑（1）

33　第3号土坑

34　第4号土坑

第17図版　土坑（2）

35　第5号土坑



36　第7号土坑

第18図版　土坑（3）

37　第6号土坑

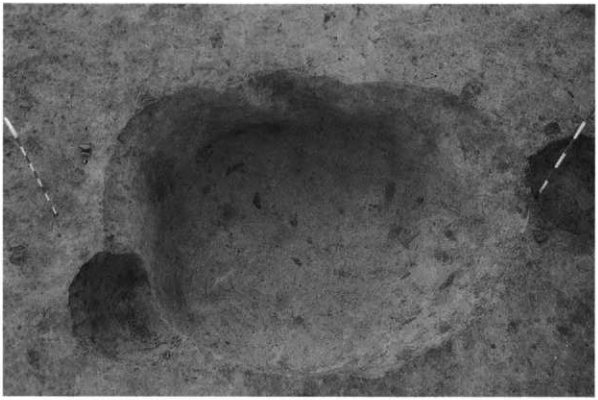
38　第6号土坑

第19図版　土坑（4）

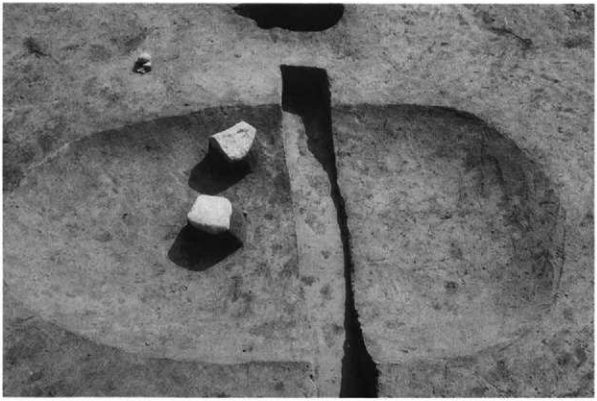
39　第9号土坑

40　第9・13号土坑

第20図版　土坑（5）

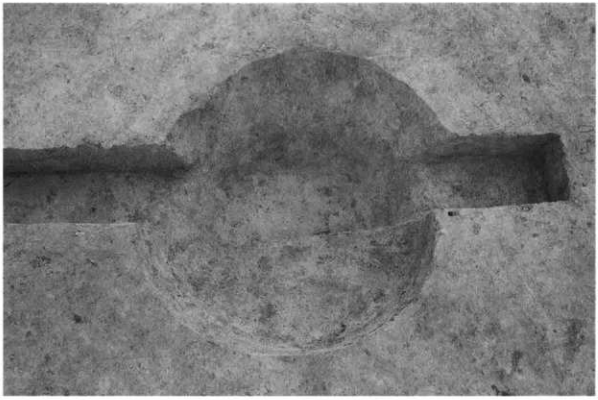


41　第10号土坑



42　第11号土坑

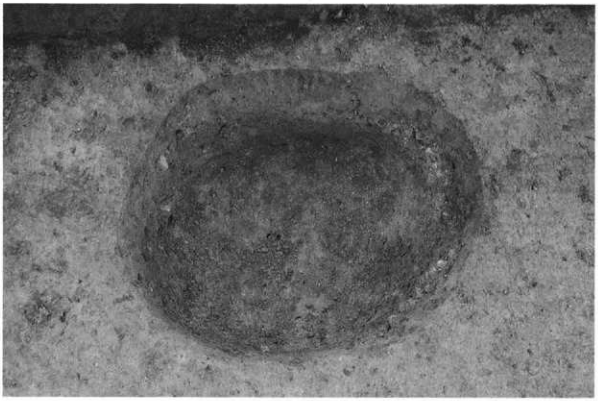
第21図版　土坑（6）



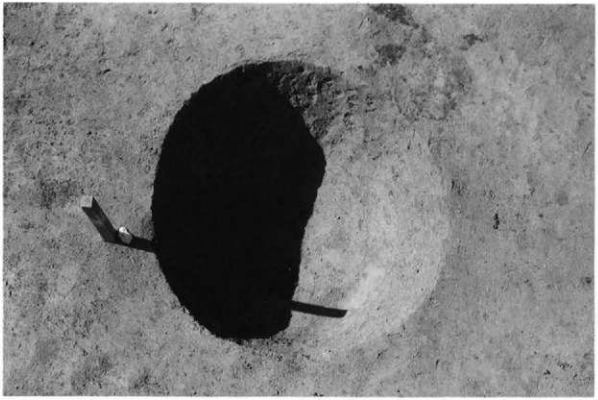
43　第12号土坑

44　第13号土坑

第22図版　土坑（7）



45　第14号土坑



46　第15号土坑

第23図版　土坑（8）

47　第16号土坑

48　第16号土坑

第24図版　土坑（9）

49　第17号土坑

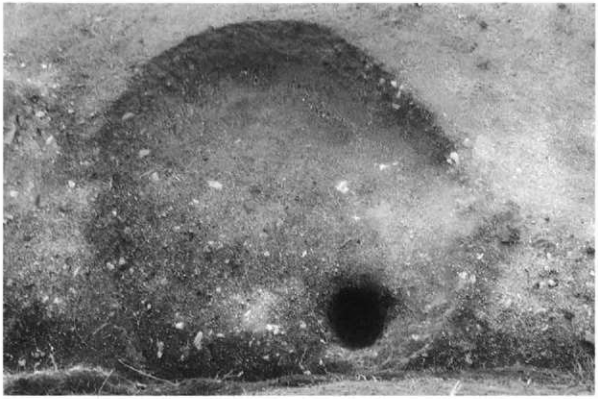
50　第23号土坑

第25図版　土坑（10）

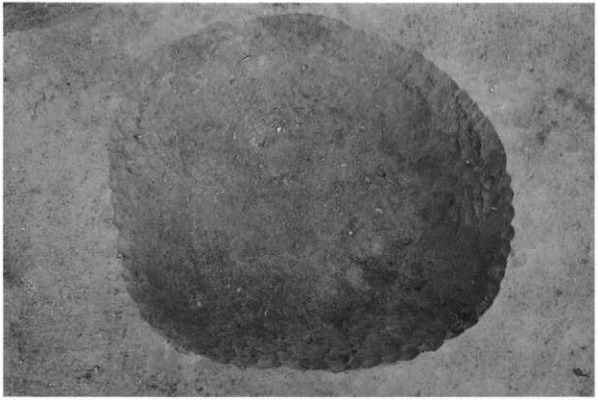
51　第24号土坑

52　第27号土坑

第26図版　土坑（11）

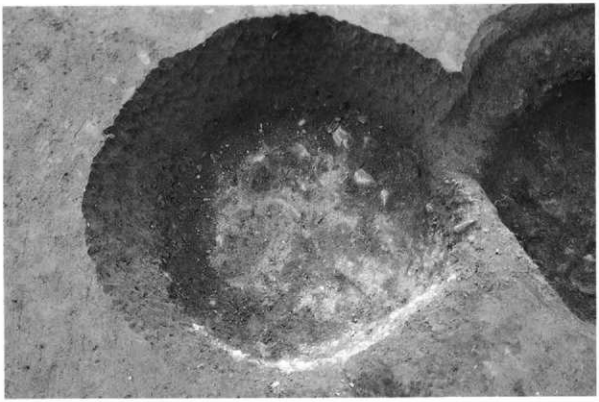


53　第28号土坑



54　第29号土坑

第27図版　土坑（12）

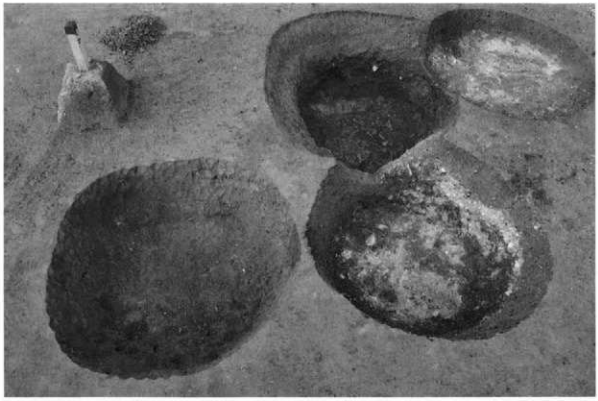


55　第30号土坑

56　第31号土坑

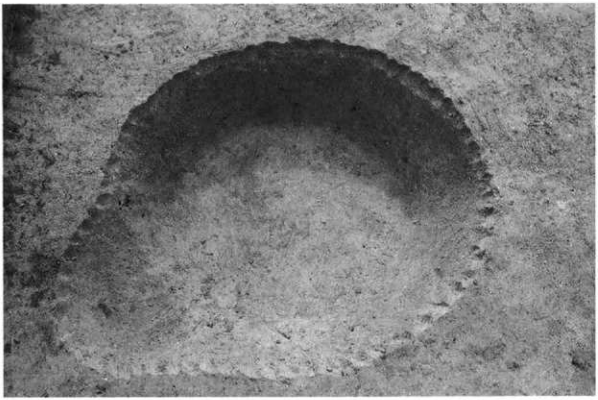
第28図版　土坑（13）

57　第32号土坑

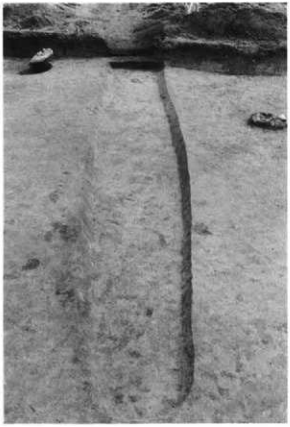


58　第29～32号土坑

第29図版　土坑（14）

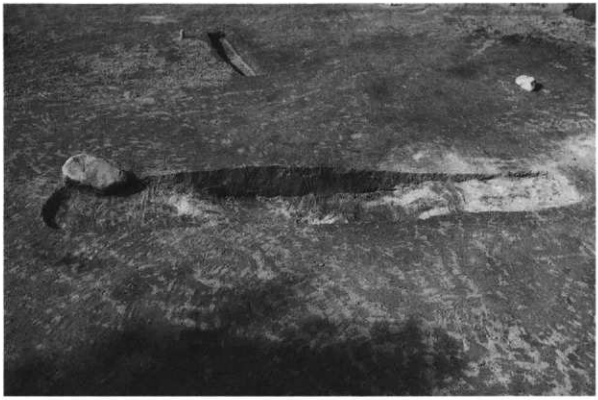


59　第33号土坑

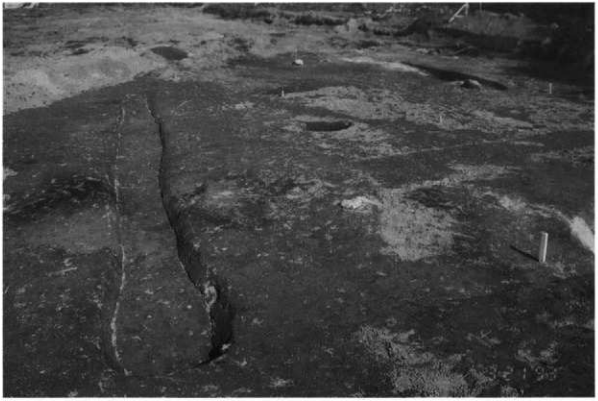


60　第1号溝跡

第30図版　土坑（15）・溝構（1）



61　第2号溝跡



62　第2・3号溝跡

第31図版　溝跡（2）

63　第1号集石

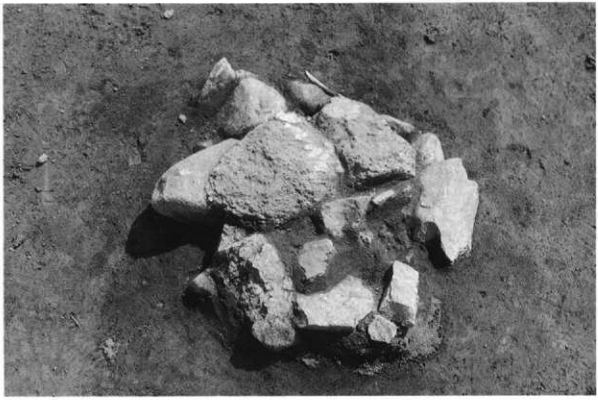
64　第2号集石

第32図版　集石（1）

65　第3号集石

66　第4号集石

第33図版　集石（2）



67　第6号集石

68　第6号集石

第34図版　集石（3）

69　第7号集石

70　第7号集石

第35図版　集石（4）

71　第8号集石

72　第8号集石

第36図版　集石（5）

73　第10号集石

74　第12号集石

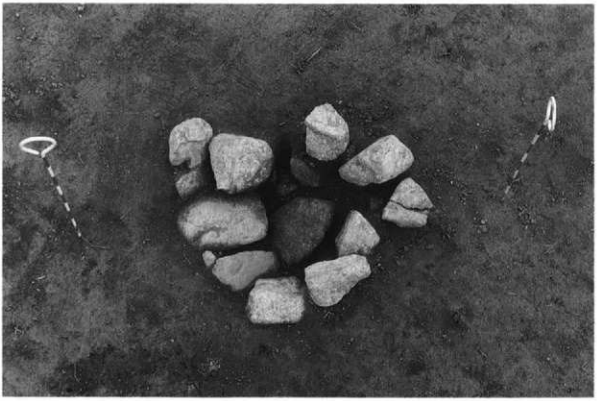
第37図版　集石（6）

75　第13号集石

76　第13号集石

第38図版　集石（7）

77　第14号集石



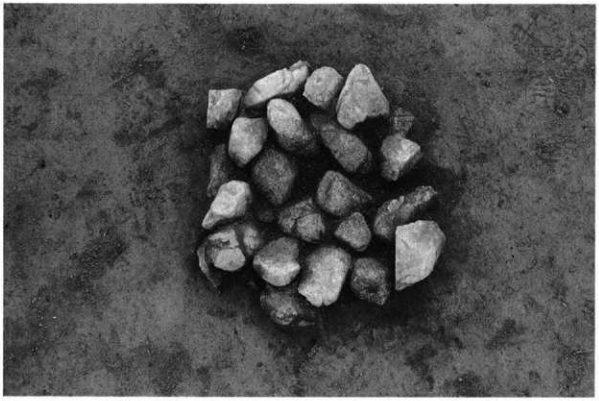
78　第15号集石

第39図版　集石（8）

79　第16号集石

80　第17号集石

第40図版　集石（9）



81　第18号集石

82　第18号集石

第41図版　集石（10）

83　第19号集石

84　第19号集石

第42図版　集石（11）

85　南端集石群

86　第1号木炭窯跡

第43図版　集石（12）・木炭窯跡

87　縄文土器出土状況（1）

88　縄文土器出土状況（2）

第44図版　土器出土状況

89　調査風景　北半部分

90　調査風景　南半部分

第45図版　調査風景（1）

91　調査風景　南東部分

92　調査風景　南西部分

第46図版　調査風景（2）

報告書抄録

ふりがな	はらいせき　いこうへん
書名	原遺跡　遺構編
副書名	県道相馬・浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１１集
編著者名	堀　耕平・斎藤直之
編集機関	福島県原町市教育委員会
所在地	〒975　福島県原町市本町２丁目２７　TEL 0244-24-5284
発行年月日	西暦　１９９５年3月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はら 原	ふくしまけん はらまちし 福島県原町市 ばばあざはら 馬場字原	07206	0081	37度 36分 00秒	140度 55分 30秒	1次 19930212 ～ 19930325 2次 19931019 ～ 19931124	3000 700	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原	集落跡 生産遺跡	縄文時代 早期末葉 ～前期前葉	竪穴住居跡　24軒 土坑　34基 溝跡　3条 集石遺構　18基 焼土跡　20基	縄文土器、石器（石鏃・石槍・磨石・石皿・削器）、石製品（玦状耳飾り）	所謂馬蹄形集落跡
		現代	木炭窯跡　1基	レンガ	

原町市埋蔵文化財調査報告書　第11集

県道相馬浪江線付替え工事
関連遺跡発掘調査報告書
原遺跡　遺構編

平成７年３月　発行

発　行　福島県原町市教育委員会
〒975　福島県原町市本町二丁目27番地

印　刷　有限会社ライト印刷
〒975　福島県原町市北新田字信田370番地－１